

「根」の女

蒼擘

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて、戦乱の時代と呼ばれた時があった。国の下、各有力一族が覇を競い、戦い、死ぬ。それが忍であった。その戦乱の世を終わらせたのが、木ノ葉の初代火影・千手柱間とその好敵手であったうちはマダラだ。

その二人の名前は無論有名であるが、二代目火影を除き、その側で活躍した者の名前はあまり知られていない。特にうちはの人間に関しては、マダラが反乱した関係で殆どないに等しい。

彼女はその一人。

「うちはの阿修羅姫」と呼ばれた女が、従兄弟を殺し、従兄弟を生かす為に奔走する話。

目次

ババア、姪孫と戯れる	1
ババア、卒業する	6
閑話	11
ババアと子どもたち	19
ババア、サバイバル演習する	25
ババア、サバイバル演習をする(式)	30
カカシ改造計画	39
波の国編	
ババアと大工	47
閑話2	55
傍観者、曰く	63
三ババア	72
幕間	84
波間に消える斑雪	91
小話	96

ババア、姪孫と戯れる

「生存者一名……どうやら子供のようですよ！」

四代目火影が死んだ。

人柱力であるうずまきクシナと共に、赤子であるナルトに九尾を封じて、里を守ったのだ。それを三代目火影・猿飛ヒルゼンは結界越しに一部始終見ていた。見ていたからこそ、この生存者が恐ろしく思える。

途中、子供が九尾を制御していたのも見ていた。まだ幼子ながら写輪眼を開眼していたのも知っている。そして、何よりその顔が三代目のよく知っているうちの者によく似ていたのだ。

後にその子供は、うちには預けられる事になる。写輪眼に対抗出来るのは、写輪眼以外にない。

*

ごろり、と布団の中でまどろむ。

それでもカーテンの隙間から光は忍び込んでくるもので、シスイは身体に纏わり付く眠気を無理やり打ち払い、おぼつかない足取りで窓を開けた。朝特有の澄んだ空気が肺腑を満たす。其処で漸く、シスイは朝が明けたのを感じられるのである。

それは毎朝の恒例行事みたいなものだった。

「おはようございます、シスイさん」

手袋をしたエプロン姿の少女がシスイを起こしに来る。それも大体毎日の事だ。

「んっ、おはよう。イルマ」

シスイが手を上げて、軽く答えるだけでもイルマはにっこりする。何も知らない人間が見たならば兄妹か年の離れた許嫁に思ったかもしれない。しかし、血こそ繋がっているが、イルマとシスイはそんな甘い関係ではなかった。

うちはイルマはシスイの大伯母だった。つまりは、シスイの祖父カガミの姉に当たる。イルマは姪孫としてシスイを可愛がってはくれるが、忍としては厳しい人なのである。

「今日の目玉焼きは偶然双子でしたよ！」

いそいそとベーコンエッグを持ってくるイルマの見た目は十代前半。パツと見で言えば、ぴちぴちのアカデミー生だ。本来ならば、三代目火影よりもずっと年上なのだから100近くてもおかしくないのに、シスイよりも若い見た目なのは無茶な忍術の使い方をしたかららしい。

「へえ、なんだか面白いな」

らしい、と言うのはイルマが詳しい事をシスイに教えてくれず、シスイには検討がつかないからだ。時空間忍術も時間を操る類の忍術であるが、印から印へと跳ぶ点や空間を歪めての移動という点から横の移動とも言える。だが、イルマは言うなれば縦の移動をして来た。

無論、負担がない訳ではない。

幼くなった姿も練り込んだチャクラを行動出来る最低限まで吐き出した結果である。また、イルマは左腕の肘から先を失っているのもその弊害だったのではないかと密かにシスイは思っている。イルマ自身は「好いた相手が寂しくないように、上げた」などと嘯いていたがそんな殺伐とした恋愛話など好みではないので、敢えて聞かない。

シスイとイルマの奇妙な生活は今年で既に7年目。家族のないシスイにとつて、コレはコレで楽しい日々だった。

「今日は…まあ、遅くなるかもしれないから」

シスイはそう言うのと味噌汁を呑んだ。暗部の仕事は詳しく言うことが出来ない。例え、イルマ自身が暗部の一員だとしても告げられないのだ。

イルマは頬杖をつくとき、シスイを見つめた。

「実は昨日、志村の聞かん坊から結婚を前提としたお付き合いを申し込まれました」

「そっか」

シスイは味噌汁の具を口にする。今日は大根と油揚げだ。鰹節の香りと味噌の香ばしい香りがとても食欲をそそる。そして、飲み干した。きつとイルマと結婚出来る男は幸せなんだろう、なんてシスイは益体もない事をぼんやり思った。

ーそして、時は動き出す。

衝撃は常に遅れてくるものなのだ。

「ハア？結婚？いや、何言ってるの？ってか、誰と誰が？」

「私と、志村さん家のダンゾウくんが」

シスイは目の前のイルマを見る。中身は兎も角、見た目から言えば、将来的にはーこの場合、かつては、かもしれないがー大きくなるだろう胸に細い手足とあどけなきの残る顔立ちは何処からどう見ても子供だ。

志村ダンゾウといえば、泣く子も黙る暗部の「根」の創始者にして忍の闇を模した様な男である。そんな男がイルマ相手に求婚とは、里内外が大騒ぎになるに違いない。

「私を知らない人から見れば、少女趣味の変態ロリコンに思われ、私の事を知っている同輩達からは変態熟女趣味と思われる。何一つ良い事などないのでよ。それなのに、諦めてくれないのです」

イルマは紅茶をかき混ぜていたスプーンをシスイに突き出した。やり場のない感情が込められているせいか、ただのスプーンがシスイには怖い。

「第一、私は……今となつては未亡人になってしまったかもしれませんが婚姻関係継続中で、こうして無謀にも後世へ飛んで来たのにはちゃんとした目的があるのに！一体、どうやってお断りすれば良いのでしょうか」

「うちはマダラから木ノ葉を守りたいって言えば良いだろう」

シスイは着々と朝ご飯を食べ進め、デザートヨーグルトに手を出し始めた。甘酸っぱいブルーベリージャムが白いヨーグルトに掛かっているシンプルな物で、凄く美味しそうである。このままデザートに集中出来れば、シスイにとって素敵な朝ご飯は素敵なままで終わるといふのにイルマの悩みも放っておけなかった。やはり、シスイにとってイルマは家族なのである。

「その主張は二代目にもしましたし、うちはマダラの死体が燃え尽きるところを見るまで安心出来ないって言っていたんですけどね。安心と安定の「うちは病」扱いです。実弟にまで憐れみの眼差しで見ら

れた位ですから」

「……まあ、死んだ筈のマダラと会って生きているのは私位でしょうし。」

そう締め、イルマは頭を抱えた。断りたくても断れない様にダンゾウから条件を付けられているのかもしれない。それでも、シスイにとつては今現在生きているかどうか分からない。うちはマダラよりも、何時クーデターを起こすかどうか分からない今のうちは一族の方が怖い。

イルマは常々、「うちは一族のみが滅びるならばそれも致し方なし!」とか「膿は出さないと」とうちは一族の立場には立たぬから良いが「強硬派に里創設期とうちはマダラの所業を幻術で見せて目を覚まさせてやる」とも言っていたので、何か思う事があるのだろう。体外的には、九尾襲撃時に孤児になり、うちはに養子に來た事になっているのもきつとそれに拍車を掛けているかもしれない。

「なら、孫が結婚するまで考えられないとかお茶を濁しておけばいいと思うが? 昔の結婚相手の事も踏ん切りつかないんだし」

忍はいつ死ぬか分からない因果な商売である。故に、若くして結婚して子供を持つ者も少なくないが、シスイはまだ十代だ。十年頑張っても、二十代。伴侶を得るには十分に若い。一方、志村ダンゾウがどんなに狡猾で用心深く生き永らえたとしても寄る年波には勝てぬが道理。死なずに70過ぎてイルマに同じ事を言えたならば、交換日記から始める事を前提にシスイも認めるだろう。

それに、イルマが気にかけているのは何もシスイだけではなかった。

「うずまきナルトの面倒をみているのも、イルマなんだ。もつと堂々とすればいい。なんだったなら、ひ孫が心配だつてのも付け加えとけよ。結婚するまで死んでも死に切れんって」

ちなみに、ナルトは、まだ十代にもなっていない。シスイから見れば素晴らしい時間稼ぎだ。

「暗部の仮面被ってますけどね……ハア、言うのが五、六十年前なら微笑ましいのに。昔は可愛かったのにな……子猿に嫉妬して頬つぺた

膨らませちゃって」

「そういうのは、オレのいないところでやってくれ……今のダンゾウがソレやってんの想像して気分悪くなってきた」

シスイは席を立つと、任務に向けて支度を整える。イルマお手製の丸薬も忘れる事はない。これも毎日の事だ。シスイとイルマは、紛れもない家族だった。

「いって参りますー！」

「いってらっしゃいませ、シスイさん」

何時もの様にシスイを見送るイルマの表情。これが、シスイが見たイルマの最後の笑顔だった。

ババア、卒業する

東雲の空は茜と群青の入り混じった複雑な色が広がっている。朝焼けにしては禍々しい色に、彼女は一つ欠伸をした。

大木に寄り掛かって、里を眺める姿は平和そのもので彼女が血色に染まってなければ美しい絵画のようだったに違いない。

「おっと、もうこんな時間か…少し寝てしまったか」

手に握ったままの太刀を服で拭い、伸びをしたついでに仕舞う。腰にも小太刀を差しているというのに、なんとも自然な姿だった。ゆるり、おもむろに立ち上がると慌てるでもなく木々の枝から枝へと走る。

——今日は、アカデミーの卒業試験の日であった。

*

あれだけ並んでいた額当ても数少なくなり、手元の書類も一枚を残して終わっている。

イルカは裏返したまま、紙の束に混ぜなかった書類を眺めた。其処に乗っている少年の写真は寂しそうな瞳だった事を覚えている。誰かに認められたいと張り裂けそうな心を隠す姿は昔の自分を見ているようだった。

けれど、だからこそ、イルカはナルトを合格させる訳にはいかない。アカデミーの卒業とは、即ち下忍になること。一人前の忍としてイルカの庇護下から旅立つ事なのだ。

分身の術はチャクラコントロールの初歩中の初歩。チャクラコントロールの出来ない忍は戦場ですぐにバテて、狙われる。殺されるばかりか、他人の足を引っ張ってしまう。ただでさえ里内にも敵の多いナルトだ、自分の身を守る術がなければイルカは後悔してもしきれなくなる。

だから、絶対に卒業を許さなかった。

「イルカ先生？」

同僚のミズキに声を掛けられ、イルカは慌てて手元の書類に目を向

けた。頼りなさげな表情をした少女がこちらを見つめる、その書類を。

「最後は…うちはイルマですか」

イルカから見て、イルマはナルトとは違う落ちこぼれである。写真に映るその姿は今よりも幼く、その瞳は意外にも強い。イルマは元々体術を得意とし、座学も忍術も中の下でもこれから如何様にも伸びる筈だった。

そう、だったのだ。

それが落ちこぼれにまでなったのは、うちはイタチによると思われるうちは襲撃事件に端を発する。その日、うちは一族は皆、「死んで」いた。例外は、その時居住区にいなかったうちはサスケと数年前目覚めたイルマのみ。

「ええ、イルマです。久しぶりですがナルトよりも大丈夫でしょう」

ミズキの薄笑いにイルカは押し黙る。ミズキは目覚めたばかりのイルマを知らないからそんな軽口を叩けるのだ。

目覚めたイルマは、恐慌状態に陥っていた。そして、一人一人と衰弱していくうちはの者を看取り、義兄のシスイから離れようとしなかった。その為、卒業試験にすら出ずに病院に引きこもり続け、今日まで来た。

「ええ、無事に卒業して欲しいですね」

技でも力でもない。イルマに必要なのは、もっと別のモノだとイルカは思いながら、曖昧に笑う。

控えめに叩く音に応えれば、一礼して黒髪の少女が入って来た。

成長期とあって、他の現役アカデミー生とは身長も体格も大人のソレに近い。表情が幼くなければ、講師に見えたかもしれない。

将来が楽しみな顔立ちである。

「……うちはイルマです。よろしくお願いします」

頼りなさげな声で挨拶したイルマは視線を彷徨させた後、イルカ達へ向き直る。光の中で見るイルマの瞳は濃い紫をしていた。

「じゃ、四人分の分身をしてください」

ミズキの声にイルマは一つ頷き、印を結んだ。ポンツと軽い音と煙

が立ち上る。其処にはイルマより少し年上の女が四人現れていた。黒髪や目の色など、イルマの特徴を持った女は端からみれば姉の様に映るだろう。きちんと四人分の分身を作れているし、ちよつと惜しいが分身も出来ている。

合格させても問題はなさそうだ。しかし、ミズキは違う意見のようだ。

「折角だ、尊敬する人に化けて喋ってみなさい」

「ミズキ先生！」

戸惑うイルカに対し、緊張しているのかイルマは何も言わずに印を結ぶ。先程よりも練り込まれたチャクラに反応してか、もくもくとした煙が立ち上る。

その煙が薄れた時、そこにいたのは四人の男達だった。左から初代火影・千手柱間、二代目火影・千手扉間、三代目火影・猿飛ヒルゼン、そして四代目火影・波風ミナトだ。

分身であるのに、その威厳が眼差しや呼吸音だけでも伝わってくる。見る者を圧倒する覇気がそこにはあつたのだ。

イルカはその四人に見入った。もう、それがイルマの分身であることなどすっかり頭から吹き飛んでいた。今は目の前にいる歴代火影が何を言うのか、それだけが気になった。

柱間が息を吸う。

「皆の者、元気か？ワシも元気だぞ！あ、もうワシは死んでおつたか！」

「ーいや、スマンスマン！」

豪快に笑いながら、柱間は黒髪をかきあげた。その余りの豪快さと気安さに、イルカの想像が音を立てて崩れていく。

「兄者、漫談はそこまでにせい」

それに反して、当初の威厳を保っているのは扉間である。腕を組み、柱間の暴走を止めるべく話す。しかし、それで止まる柱間ではない。

「しかしだのう、ワシの面影のある青年と話しておるのだぞ。そうじゃ！男なれば猥談でもすべきではないか？ワシは胸派じゃ」

「兄者は黙っておれ！」

扉間に怒られた柱間は影を背負い、隅っこでいじけ始めた。今ならきのこだつて生える。それをミナトが慰めている。

中々のカオスだ。その全てがイルマの分身なのだと思えば更にカオスだ。一人パイプを燻らせていた分身のヒルゼンは紫煙を吐くと、柱間を見ている。

「この者はうみのイルカ。アカデミーの教師です。火の意思を継いだ優秀な忍ですぞ」

イルカの目が潤みそうになる。まるで本人から言われているような気がしたのだ。分身と分かっているにもかかわらず認められるのは嬉しい。

「……ちなみに、私は太もも派です」

イルカは泣いた。

ミズキに引かれようと構うものか。

さつきまでの、あの感動を返せ！

「ワシは胸が大好きじゃー！」

「なっ、本当に胸派か？兄者は尻派ではなかったのか？」

ワイワイガヤガヤ。

威厳すつ飛ばして女体の神秘とやらを語る火影達を止める者などおるまい。……いや、一人だけその可能性を秘めた者がいた。

四代目火影・波風ミナトだ。

彼はアイドルさながらの三角座りで、ニコニコと火影達を眺める。

その視線に三対の視線がミナトに集まった。

ミナトは朗らかに微笑む。

「んー俺はクシナ以外どうでもいいですから」

嘘偽りない惚気にその場全員が沈む。同じ火影でも圧倒的に違うのだ。

若さか？性格か？それとも別の要因か？

それが分かれば苦労しないだろう。

地味に被害を受けたイルカとミズキは手を叩いて試験の終了を告げた。

うちはイルマが、アカデミーを卒業した瞬間だった。

閑話

月もなく、鉄紺の暗闇が忍の時を告げる。

イルマが卒業した瞬間、いやその一部始終を見ていた者がいた。全てを映す水晶を覗き込むのは、木葉隠れ最高にして最強と名高い三代目火影。プロフェッサー教授という渾名で呼ばれる事もある猿飛ヒルゼンである。彼は大きな溜息を吐くと、振り返りもせずにもソレを呼んだ。

「千」

「ハイハイっと。いや、お掃除も大変ですよ。おや、昼間の映像も見れるなんて、便利な水晶ですね」

暗殺でも上手くいったのだろうか、妙に調子の良い返事と軽い態度で現れたのは、背と腰に刀を差した少女だった。面は狐。肩の刺青がその者の所属を現している。

——火影直轄の暗部。

だというのに、三代目は恭しく話し掛けた。

「貴女は何という事をしてくれるんですか」

「いやーお掃除とお掃除とお掃除と……暇つぶし?」

可愛らしく、しなを作る狐面に三代目は溜息で答える。暇つぶしの割にクオリティを求めるのは、完璧主義が高じてなのかもしれない。ただ、弊害は出る。

「初代様と二代目様は兎も角、あれではワシがただのスケベみたいではないか！四代目は可愛いのに」

「え、違ούνですか?……嗚呼、太もも派じゃなく、尻派でしたか?それは申し訳ありませんでした」

狐面は小首を傾げて考え込む。思い返すのは若かりしヒルゼンの様々な醜態と、伝説と呼んでも良い程の喧嘩内容だった。乳房の大きさを志村ダンゾウと争い、二人揃って山中ビワコに締められた話は誰が聴いても忘れられないだろう。

偉大な忍者である事は否定しなくとも、スケベなのは誰も否定できないに違いない。

「ワシは。パーツよりも女体の曲線と柔らかさに重きを置いて……」

まあ、よい。今回ナルトが合格せねば次の試験に挑戦してもらおう事になる。警護はどうなさる？」

「うちは中心になりますかね。病院にはまだ生き残りがいますから」
世間では純粹なうちは一族はイタチとサスケの兄弟以外いないと思われている。だが、本当は違うのだ。

うちは襲撃事件の原因、それは幻術だった。月読にも似た、強い幻術に皆囚われてしまっている。一人一人と衰弱死する中、若干名生き残る人間がいるのも事実。その目を狙う輩を捕らえる為なら彼らを囚にすることなど造作もない。幻術に長けた写輪眼すらも欺ける技だ、警戒せぬ訳にはいかないだろう。

その時、里の外れで大きなチャクラが動いた。

「このチャクラは……」

覚えのあるチャクラだった。九尾のチャクラ混じりのそれは、怒りと嘆きで叫んでいる。狐面は三代目を見た。その目は口ほどに物を言う。根負けするのは当然だ。

「ナルトが……初代様の禁書を持ち出してな」

「それで？禁書を持ち出した子供一人回収するのは難しくない筈だと思いますが……嗚呼、暗部にもナルくんを排除したいと思う馬鹿は多いですものね」

溜息をついた狐面は不意に顔を上げる。あの悪戯好きな子供が禁書の保管庫の場所まで知っているはずもない。誰に唆されたのか、狐面には想像がついていた。

「そうですねー取り敢えず、お願いがあるのですが……」

バツの悪そうな三代目に、彼女は狐面を外して微笑みかけた。

「……私が殺りますね。あの男、前々から私の可愛い子にちよっかい出しているみたいなので」

彼女は瞬身で三代目の前から消える。残された三代目は、一人零した。

「貴方様が今も変わらず里の子を助けている。それを二代目様が知つたらどのように思われるのでしょうか……イルマ様」

その独り言は誰にも聞かれる事なく、消えて行つた。

*

うちはイルマはこの時代の人間ではない。戦乱の色濃い世界を生き延びた残骸であるイルマがこの時代に落ちたのは、必然だがその瞬間に立ちあつたのは偶然だった。

それは12年前の10月10日の事だ。イルマさえ油断していなければ四代目火影とその奥方は今も生きていたかもしれない。その後悔の念は絶えることなくイルマの中で燻っている。

だから、ナルトを溺愛しているといえればそれも違う。九尾の人柱力だからでも権力者の子息だからでもない。眠るナルトを見た時からイルマは愛おしく思っていた。望まれて生まれ落ちた存在を守りたかったのだ。

血の繋がった両親の様にはいかないだろうが、不足のないように護衛役を年齢詐称をしてでも勤めていたというのに！

「……下賤な輩と虫はこれだから困る。水と土さえあれば何処でも湧いてくるのだからな！」

封印指定の禁術が知りたけりや、手前の身体に叩き込んでやんよ！と言わんばかりの荒れように、他の暗部が逃げて行くのが分かる。ただでさえナルト鼻根で厄介な狐面が、ガチ切れしているのだ。普通の暗部ならドン引くだろう。

それが任務帰りの血生臭い姿で、しかも、つい先程まで彼女が溺愛するナルトを「ぶつ殺す」だのいきり立つ忍が集っていたのも知っていたのだから余計。普段冷静な人程、怒ると怖いものだ。

「ちよつとちよつと！そんな殺気立って何しているんだ」

「テンゾウですか。どいて下さい」

顔馴染みの暗部の制止を振り切り、進もうとする。仮面被っている仲間同士、普段はそんなに仲が悪い訳ではない。だが、今日に限っては事情が違うようだ。

「……テンゾウさん、離して下さいませんか？」

木遁に絡め取られたイルマは丁寧な口調で微笑みを湛えながら、片

手に風のチャクラを貯める。指先に刃を具現化させると、纏わり付く枝を切り落とす。

「そんな殺気立った千を行かせる訳には行かないよ。下手すると里の人間まで巻き込みそうだし」

「あら、では貴方は巻き込んでもよろしいということかしら」

イルマは駆けた。

そして、相手の首に腕を引っ掛けるカタチで抱きつく。印はナルトが持っている。後は、それに向かうだけ。

意識を集中させ、跳んだ。

暫し酩酊にも似た感覚が襲うも、イルマは態勢を持ち直して着地する。先程まで雷によって活性化させていた肉体への揺り戻しで冷や汗が流れるも、目的達成による充実感疲労に勝った。

視界には、ボコボコになったミズキと血塗れのイルカを守るようにクナイを構えたナルトがいた。

「飛雷神の術だと……千、君って奴は」

「それより、ミズキの捕獲を。私はこちらの処置をします」

酔ったのか、テンゾウは俯いたままだ。それでもアカデミーの、それもボコボコにされた後の中忍よりずっと強いだろう。イルマはナルト達の方へと向かった。

仮面の暗部が何も言わずに近寄ってくるのを知って、イルカはナルトを後ろに隠す。ミズキに騙されていたとは言え、元々はナルトが火影から禁書を持ち出したのが原因なのだ。

この暗部がナルトに殺しに来たならばナルトを守らないと。

「ナルトが悪いんじゃないんです！」

イルカは両手を地に付けて、懇願した。

五体満足なナルトと、満身創痍のアカデミー中忍が二人。場合によつては、イルカがナルトを唆した様にもとれる。今出来る事は、真実を語る事だけだった。

「うみのイルカ中忍。貴方は死にたいのですか？」

その言葉にイルカは覚悟を決め、瞼を閉ざす。けれども、次に来たのは冷たい言葉ではなかった。

「全く、そんな身体で土下座など自殺行為です。そんなに動けるならば、治療しやすいように上を脱いで下さい」

劳いの言葉と肩に置かれた手が、優しい。動揺するイルカの身包みを剥いで、イルマは傷を眺めた。

背中に風魔手裏剣による大きな一撃と細かいクナイ跡。胸や腹にもクナイの跡から血が流れている。ベストには巻物や武器が仕込める様になっているのに此処まで貫通しているのだ、ミズキが二人を殺す気だったのが見て取れる。

イルマが傷の検分をしている側でナルトは涙の残る顔で呟いた。

「イルカ先生はオレを助けてくれたんだ。お願いだ！イルカ先生を助けて」

「任せなさい」

イルマはナルトの頭を撫でると、イルカの傷を治し始めた。応急手当てにしては上等、といったところだ。ミズキを縛り終えたテンゾウがイルマの方にやってくる。ナルトから巻物を回収すると、応援の狼煙を上げた。

そう待たずに来るだろう。

「さて、これで大体終わりです。あとは病院で検査を受けて下さい」

イルマはそう言うのと先に気絶するミズキの元へいった。無理矢理叩き起こすと、その目を覗き込み、死んだ方がマシな幻術を掛ける。これでイルマの溜飲は下がった。

此処からが本題だ。

イルマはナルトの側に寄ると膝をつき、顔を反らせぬようナルトの頬を抑えた上でナルトと視線をあわせる。子供特有のぷにぷにホッペを触っていたかったからと言うのは内緒だ。

「さて、君は今日した事はとても酷い事です。分かりますか？」

「その話は後でオレからしますから！」

イルカは慌てる。だが、それを無視してイルマは続けた。

「君は君を大切に思ってくれる人を裏切りました。三代目やイルカ先生は君が大切に、見守りたいから厳しい事を言うのです。甘い言葉で囁く者が良い者とは限りませんから」

ナルトは、拳を握った。

ミズキはイルカよりも何時も優しく接していた。だが、蓋を開ければミズキはナルトを蔑み、イルカはナルトを守ってくれたのだ。

イルマはイルカのベストをナルトに持たせた。それは重くて、濡れた血の感覚が不快にさせる。

「忍たるもの時には、誰かの物を奪います。それは時に荷物であり、生命です……仲間の生命を犠牲に目的を達成する時もあります」

イルカの血で染まったベストはまだ赤々と濃く色を残している。致命傷を避けていたとしても、それだけの血が流れたのだ。イルマはそれをナルトの所為だとは言わない。ただ、その重さを知ってもらいたかった。

「――本当、君が無事で良かった。折角平和な時代に生きているのですから、仲間を大切になさい」

イルマはナルトを抱き締めた。そして、もちもちホッペに頬ずりする。仮面がなければ、もっとナルトの頬を堪能する事ができただろう。しかし、仮面がなければイルマのどろけた顔面を晒す羽目になっていたのだから世の中分らないものだ。

たぶん、ドン引きを通り越してしょっ引かれるレベルである。

仮面越しにテンゾウが何かを受信したのだろうか、ナルトからイルマを引き離れた上で、縛って担ぎ上げた。イルマにとつては非常に不本意な結果である。

そのまま立ち去ろうとするテンゾウとイルマにナルトは、はにかみながら告げる。

「あのさ、暗部のネエちゃんありがとう……なんか、ネエちゃんつてば、小さい頃によく面倒見てくれた暗部の人に似てるんだ。だから、嬉しかった」

イルマはその愛らしさにノックアウトし、テンゾウはイルマの残念さを嘆いた。

これ以上の醜態を晒す前に、テンゾウは撤収したという。

オマケ

ナルトとイルカから大分離れた場所で、テンゾウはイルマを下ろした。暗部でも、イルマの残念ぶりは有名で子供に纏わる事ならば必ずイルマが出動するという。殊に、ナルトに関しては百パーセント関わると。虐めていたとなると、必ず報復をする。

報復はナルトに対してのイジメ具合で変わり、イジメた忍を積極的に死地に送り込んだという噂もあるくらいだ。今回、三代目が頑張つて情報を隠蔽していたのは正しい判断だと言えよう。

「千、キミの憤りも分からなくないよ？でも、もつと暗部らしく振る舞ってよ」

「分かりました、これからは暗殺メインで」

にこやかに怒るイルマの脳裏では、ナルト探索で「どうせロクな奴じゃねえんだ！」とかその後の口にするのも汚らわしい言葉を吐いた奴らの名前を一生懸命纏めていた。有力な家柄出身の奴には、社会的信用を失うような手紙を送る事を決めている。

女の子が耳年増なら、イルマは既に魔女である。手練手管でチョイのチョイだ。

「違うからー・なんで、そっちの方向に行くの?」

テンゾウは思わず突っ込んでしまった。

暗部らしきとは、三代目の命令を重視して適切に動くことである。まかり間違つても、ナルト可愛さに優しく恫喝する事ではない。

三代目と志村ダンゾウの激しい推薦と任務時の働きぶりがなければ、イルマは暗部から外れていただろう。

「それより、ナルトが無事で本当に良かった」

「千……」

テンゾウは何も言わずに胸を貸してやった。泣きそうな女を慰められるのも、良い男の条件だろう。安堵の溜息をつくイルマの背を撫で、抱き締めてやる。

ベストに水分が吸われていくのが分かる程、イルマはー。

「あ、ゴメン。ベスト汚れちゃった」

「この雰囲気では鼻血はないでしょー!」

鼻血を出していた。子ども好きも此処までいくと病的に思える。

「で、でも、ナルくんが私の事を覚えていてくれたし、ありがとうって！あーホッペふわふわだし、まだ小さいし可愛いよ！」

鼻血が増えた。

これでシヨタコンでないのだから不思議である。なぜなら、イルマは女の子も愛でるのだ。最早、「可愛いは正義！」という言葉の体現者である。しかし、忘れてはならない。

可愛いは、作れるのだ。

「じゃ、これも？」

白煙が上がり、テンゾウは幼い時の自分に変化した。小さい手足に細い首、頼りない身体に不釣り合いな仮面。そのアンバランスさがまた良い。

「お給料払いますから、たまにお願いします！」

イルマは迷わずテンゾウを抱き締めた。

それを知った某聞かん坊が「その手があったか！」と、暗部に嫌がらせをする傍ら変化をしてイルマの家に押し掛けるのはその後の話である。

ババアと子どもたち

その日、うちはサスケにとっては災難続きの日だった。

とある人を時間ぎりぎりまで探した所為で朝ご飯も食べられず、苛立ち混じりにアカデミーに向かえば指定された教室の前には黒山の人ばかり。さっさと入れれば良いのに、と教室を覗き込めば真ん中の机にソレはいた。

小花の散ったパフスリーブのチュニツクに黒のサブリナパンツという忍らしからぬ格好をし、何時もは緩く纏めている黒髪を垂らし、自らの左腕を枕に安らかに眠れる森の美女よろしく瞼を閉ざすソレ。

サスケが今朝探していたその人だった。

「あの人、誰かしら？」

「分からないけど……年上みたいだし、アカデミー生じゃないわよね」
ヒソヒソとした話し声にサスケの怒りは頂点に達した。

年の離れたアカデミー生に混じるのだから一人では心細かろうと迎えに行けば家はもぬけの殻で、病院にもおらず、修行でもしているのかとうちはの居住区を探し回ったというのに本人は呑気に寝ていたなんて！怒らぬ訳がない。サスケは人だかりを掻き分けて彼女の机を蹴る。もぞり、と持ち上がる額を叩いて、彼女を起こした。

「イルマ！」

「あれ？サスケくんだ。おはよー」

ふんわりした笑顔と、寝起き特有のぼけぼけ感が漂う少女の名はイルマ。彼女は側に置いてあったバスケットをサスケに手渡す。

「牛乳配達と新聞配達してたら眠くなっちゃって。沢山作って来たからサスケくんも食べる？」

中にはサンドイッチが入っていた。

ベーコンとレタスの間に薄切りトマトが沢山入ったB・L・Tに、オムレツをパンで挟み、ケチャップを掛けたタマゴサンドなど実にサスケ好みのサンドイッチばかりだ。

「食べないと大きくなれない…だろ？有難く頂戴する」

サスケは薄く笑みを浮かべた。イルマは始めからサスケが食べる

事を見越して作ってきたに違いないのだ。

ただでさえ注目されている中で、あのうちはサスケが笑ったのだ。ギャラリーが騒がない訳がない。

「何よあの女！サスケ君に馴れ馴れしいわ」

「アカデミーも卒業出来なかった年上のクセに」

嫉妬と誰何の視線が飛び交う教室に、慌ただしく黄色の少年が駆け込んできた。金髪に青い目が映える少年は、イルマを見ると不思議そうな顔で近づく。

「あのさ、あのさ、ネエちゃんってば誰？」

騒ついた教室が一瞬静まり返った。

意外性ナンバーワンの忍者が空気を読まないおかげでサスケと親しいイルマが誰なのか分かるのだ。耳が象みたいになってもおかしくない。

尋ねられたイルマは眩しい者を見る瞳で眺めてから、噛み締めるようにその名を呼んだ。

「君は……うずまきナルトくんですよ？私はイルマ。うちはイルマよ」

思いがけぬ微笑みにナルトは少し戸惑うも、イルマの瞳に蔑みの色がないのを見て破顔した。

「オレの名前を知っているのか！アレ？うちはって…」

ナルトの視線がサスケに注がれる。

それもその筈、四年前に起こった襲撃事件でうちは一族は数人を除いて死んだ。木ノ葉で真っ当に生活しているのはサスケ位なのに。

ナルトの思いを読み取って、イルマは説明する。

「私は養子だから。目が覚めたのも三年前なんだよ」

「ーだから、今年アカデミー卒業した落ちこぼれなの。」

そして、そう結んだ。

他方、周囲の子供達もイルマがサスケの親戚だと知って安堵する。年上ではあってもサスケより取っ付きやすそう性格だというのもそれに拍車をかけた。

喧騒は、日常へと変わる。

イルマは隣に腰掛けたサスケに尋ねた。

「サスケくん、サンドイツチどう？」

「もう少しトマト多めだと嬉しい……イルマ、お前、何してんだ？」

サスケはイルマを見る。正確には、イルマの両腕に閉じ込められたナルトを。

「なんかき、オレ上手く言えねえけどさーイルマのネエちゃんつてば、なんか懐かしいんだってばよ」

「……そう。もしかして昔会ってたのかもしれないね」

ナルトはぬいぐるみのクマみたいにイルマに後ろから抱き上げられて、頭を撫でてられているナルトは嫌がるそぶりも恥ずかしがる事もなく、されるがままに愛でられていた。イルマはとろけそうな笑顔である。

それがサスケには腹立たしい。

「イルマ、初めて会った奴に馴れ馴れしく触るな」

髪の色が違う。目の色も違う。

そうだというのにイルマとナルトが親子か、姉弟に見えるのだ。同じ『うちは』は、サスケなのに。

「あー！サスケつてば、オレがネエちゃんと仲良くしているから嫉妬している！」

「してねえ」

ナルトはイルマの腕から机の上に飛び乗ると、サスケの前に詰め寄る。所謂、ガンを飛ばす状態だ。

顔と顔を近付け、互いの目を睨む。牽制し合う二人に不幸は容易く訪れた。

「あつ、悪い」

前の席の子がナルトにぶつかり、ナルトの唇がサスケにぶつかった。人間ドミノ倒しの末に、完成したのはナルトとサスケのデーパーキスだった。

横で一部始終を目撃していたイルマは、淡々と呟く。

「サスケは犠牲になったのだ……うちはのクレイジーサイコホモの流れにな」

サスケは口に広がる味噌味に、茶化してふぎけるイルマへ後で盛大な突っ込みを入れる事を誓ったのだった。

*

「だーいつまで経っても来やしない！何でオレ達7班の先生だけこんなに来んのが遅せーんだってばよオ!!」

ナルトが騒ぎ、サスケが苛立つ。そんな教室で春野サクラは困惑していた。

「サクラちゃんって、将来は絶対美人系になりますね」

全ては隣に腰掛けるイルマの所為だ。

サスケの親戚と知るまでサクラも憎らしく思っていたのもあるが、何と云うかイルマは人懐っこい過ぎるのだ。先程知り合ったサクラにも気さくに話掛けてくるし、手製のお菓子なんかもくれる。

普通なら、『家庭的なア・タ・シ、アピールか！しゃんなろー』となるところだが、イルマの振る舞いは何と云うか、自然なのだ。気負った様子もなく分けるだけだ。

「サクラちゃん、サスケくんの事好きなんでしょ？何処が好きなんです？」

ただ、その視線が久し振りに孫に会ったおばあちゃんのように、面映ゆい気分にする。サクラは座り直すと、消えそうな声で呟いた。

「サスケ君は何でも出来て、それに何時もクールで格好良いから」

単純で明快な理由だ。

呆れられるかもしれないと不安げなサクラに、イルマは嬉しそうに語り掛けた。

「うふふ、そう！サクラちゃんにはサスケくんがそう見えるのですね。出来る事ならば、サスケくんの格好悪い所も好きになつてくれると嬉しいな」

格好良い所ではなく、格好悪い所を好きになれ、とはおかしな話だ。今のサクラにはサスケの格好悪いところなど想像出来ない。

イルマは瞼を閉ざして、続けた。

「人間、誰かを本当に好きになる時、その人が何しても許せるようになるの……頑固で現実的なクセに何処か傷つきやすく、冷たいよう
情熱家という非常に面倒な男を愛している私の経験から言える
ただけだ」

「どんな男だ。つてか、誰だ。」

思わずツツコミそうになつたサクラは寸前でなんとか留まつた。
イルマの表情が、今までよりも美しく見えたのだ。真珠の肌は薄紅に
染まり、濃い瞳は潤む。

恋は乙女を彩るのだ。

「また、シスイさんの事か？」

「違います！シスイさんは家族です」

呆れるサスケにイルマは激しく否定する。真つ赤になつて否定す
る様は否定し切れてないようにも映るが、それでも違うのだろう。

サスケは何時もの事だと言わんばかりに溜息をつき、教室の扉を睨
んだ。

担当上忍はまだ来ない。

イルマは戸に黒板消しを挟むナルトを見て、小さく笑つた。

「そうだ、皆にいい事教えてましよう！」

イルマは天井のー恐らく、教材を掛ける為のーフックに紐を掛
けると、その端に濡れた雑巾を括り付け、チャクラ糸のついた千本で
雑巾を天井に留めた。

『忍たる者、裏の裏を読め』罨を仕掛ける場合は何重にも、仕掛けよ』

イルマはチャクラ糸を引く。

その時、ガラリと引き戸が開けられて担当上忍が入つてきた。ぼふ
りと白墨の粉が舞いー。

「つ、何これー」

雑巾が担当上忍の顔へお迎えに上がる。

言い換えれば、アカデミー^{歴代}の汗と涙と青春の塊^汚ミーツ^{フェイス}顔面。もつと
簡単に言えば、^{牛乳を拭いて置いて置いたような}いつ洗つたか分からない雑巾が勢い良く顔に張り付い
たのだ。取つても、臭いでやられる。最悪な罨^{イタズラ}である。

その仕掛けは至極単純で、天井に張り付いた雑巾が千本という支え

を失い落下、フックを支点に張り詰めてあつた紐が振り子の如く動いたという訳だ。

「任務の際は、時間を守るべし」

常に微笑していたイルマが一瞬、真顔になった。それだけなのに、ナルトもサクラも恐怖を覚える。普段が明るく人好きするような態度だからだろう、表情を消したイルマは冷徹な忍そのものだった。

黒髪も白い肌も無機物を思わせ、うちには似た端正な顔立ちがそれに余計拍車をかける。

「先生、何を遊んでいるのですか？早くしましようによ」

優しい人程、怒らせると怖いものだ。

――七班はまだ動けない。

ババア、サバイバル演習する

三代目から預かったファイルは全部で四冊。
うずまきナルト

春野サクラ

うちはサスケ

の三人に、イレギュラーとしてうちはイルマを加えた四人だ。

うずまきナルトは言わずもなだが、うちはの二人も一癖も二癖もある存在だと言えよう。兄うちはイタチに復讐を誓うサスケに、うちは以前の出自も経歴も全てが極秘事項として隠されたイルマ。

これで苦労しない筈がない。

また、カカシにはイルマに関して懸念があつた。いや、それはイルマ自身ではなく『うちはイルマ』という名前自体にだ。

ある時を境にして存在ごと掻き消された女の名前も『うちはイルマ』という。記述が朧げであれ、記憶は口伝で語られるもの。特にうちはならイルマなど名付けないだろう。

カカシはファイルの写真を思い出していた。

四年前にアカデミーを卒業していれば真つ当に昇進して中忍かそれ以上になっていたかもしれない。仲間意識の強いうちはが養子にした位だ、期待しても良いだろう。うずまきナルトと、うちはサスケを抑えられる程度には。

……そう、思っていた。

「最後、そこのお姉さん。自己紹介してネ」

だが、蓋を開けてみれば劣等生のナルトより復讐に燃えるサスケよりも厄介で扱いに困る存在だった。なんだ、アレ。

「うちはイルマと申します。好きなモノは卵焼き。嫌いなモノは……虫と約束を守らない人、でしょうか」

表情こそ柔らかく、イルマは毒を吐く。外柔内剛、年を経ているだけあって下忍の誰よりも強かだ。

「将来の夢は？」

カカシの言葉に、イルマは儂い表情で遠くを眺めた。

「夢ですか……愛する人の側で子孫に囲まれて老衰したいです。それ以上の喜びはないかと」

老成も此処まで逝くとどうしようもない。カカシとてまだ若者の部類ではある。だが、忍が子孫に囲まれて老衰する大変さは痛感している。

これが大戦を知っている世代ならば、まだ理解できる。だが、書類ではイルマは15才という事になっている。という事は、第三次大戦時には1才前後、九尾の一件でも3才くらいだ。それだというのに、彼女は達観していた。幾千の戦を潜り抜けた猛者の様な将来設計を語られても周りは反応に困るだけだろう。

「ネエちゃん、暗いってばよ」

「またシスイさんとの惚気か……」

案の定、少年達には不評である。しかし、少女は違う。

「イルマさんって、ロマンチストなのね。複雑で繊細な人が好きなのに、その人と添い遂げたいなんて」

少しニュアンスが違うが、恋愛事には食い付く。やはりこれ位の少女に恋愛話を好むものだ。

適度に話を切り上げて、明日の話をするとしよう。カカシは口を開いた。

「ま、お前らには夢がある。それを叶える為にも、まず明日の任務を受けよう」

「はっ、どんな任務でありますか!」

おどけるナルトにカカシは真剣な表情で告げる。

「サバイバル演習だ」

「なんで、任務で演習? 演習なら忍者学校で散々やったわよ」

サクラの不満をカカシは失笑で抑えた。続く忍び笑いがなんとも不気味である。

「いや、まーただな……オレがこれを言ったらお前ら絶対引くから」
「引くウ……? は?」

ナルトの疑問にカカシは答えた。

「卒業生28人中、下忍と認められるのはわずか10人。残り18人

は再び学校に戻される。この演習は脱落率65%の超難関試験だ！」
明日の説明をしながら、カカシはイルマの様子をうかがう。ナルトの様に騒ぐ事もサクラの様にショックを受ける事もなく、サスケの様に敵愾心を燃やす訳でもない。静かに話を聞いて、慌てる三人を楽しそうに眺めている。

まったく大人しいものだ……カカシに対しての嫌悪感を露わにしなければの話だが。時折見せる厳しい視線が明らかにカカシへの怒りを孕んでいた。

試験の内容に関しては、既に知っているのかもしれない。目覚めてからの数年で一度もアカデミーの卒業試験に挑まなかったとしても、同期はいる筈だ。

「くわしい事は皆、プリントに書いといたから、明日遅れないよーに！」

かつては、カカシにだっていたのだから。

*

カカシは驚愕していた。

例え、それがたった一人の人間が企んだ事だとしても、周りがそれに賛同しているとは思ってもなかったのだ。

「あ、カカシ先生ってば、おっそーい！」

ニヤニヤしているナルトも、目を反らすサクラも平然とするサスケもそうだった。

「何してんのー！朝ご飯食べない方がいいって言ったデショー！」

ほっぺに米粒。

満たされた表情から察するに、おむすびを食べたのだろう。一人、避暑地にでも出掛けるような格好をしたイルマが微笑んだ。

「あら、コレは昼食です。私、朝早くから働いておりますから我慢出来なくて……皆様には朝御飯になっちゃったようでも申し訳ありませんでした」

レースの日傘に、童話のお姫様みたいな袖のふわりとしたワンピース、白い手袋とこげ茶のベルトをした姿は瀟洒なお嬢様然としていた。それは決して忍の任務に相応しい格好ではない。

「それに成長期に朝御飯を食べないというのも身体に悪いですもの……幸い、軽食を消化するだけの時間も頂けましたしね」

イルマの言葉が、カカシには「手前、子供に朝御飯抜けとかふざけてんじゃねえぞ、コラ！大体、遅いんだよタコスケエがよオ！」と聞こえた。いや、間違いなく、聞こえる。丁寧かつ柔らかい雰囲気からは程遠い、恫喝。あからさまな敵意だった。

「なんでこの前から喧嘩腰なんだろうーな、この子」

「ふふ、そんなつもりはありませんでしたが何かお気に障る事でも私、しましたでしょうか？」

丁寧な口調でカカシを煽るイルマ。宙に雷遁が走っていないのが不思議なくらいだろう。

サスケは好戦的なイルマに戦慄を覚えた。

その感覚は、かつてイルマの前で納豆を全力で拒否した時にも味わっている。納豆を粗末にしたからと、食材に謝るまで全ての食べ物に納豆を入れられたのだ。あのネバネバがずっと続いてネバネバなのがネバネバしていたのを思い出される。そのお陰か、サスケは磯辺揚げなら食べられるようになったが、出来る事ならイルマを怒らせたくない。

優しい人ほどキレるとヤバイのだから。

「先生！早く始めましょうよ。ただでさえ先生のせいで遅れているのに、イイ年した大人がイルマさんに突っかかるなんてみっともないわよ！」

サクラの口撃に、イルマはニヤリと笑う。その表情は何時もの取り澄ました顔ではなく、ナルトの様なイタズラ好きの子どものような顔だった。

うちは、の名前がついているからだろうか、カカシは目の前で逝った友人を思い出す。年も性別すらも違うというのに、養子の筈のイルマは確かにうちはだった。

「あ、ああーよし、12時セットOK！」

時計を設定し終えたカカシは、鈴を取り出す。数は三つ。視線が集まる中、それを掲げた。

「これを昼までに奪い取る事が課題だ」

紐の付いた鈴は小さく音を立てる。ちりりと、心を逆立てる。

「もしオレから昼までに奪い取る事が出来なかった奴は、昼メシ抜き！あの丸太に縛り付けた上で、目の前でオレが弁当食うから」

弁当、の言葉に皆は取り乱す事もなくカカシの言葉に頷いた。しつかりとまではいかないが、ちゃんと腹に食べ物を入れた関係で冷静だったのだ。

「鈴は一人一つでいい……必然的に一人が取れない事になる。取れない奴は任務失格だ」

ーつまり、アカデミーに戻ってもらおう事になる。

そう告げるカカシの表情は忍らしい。

「手裏剣を使ってもいいぞ。オレを殺すつもりで来ないと取れないから」

本物の上忍を前にした子ども達は怯え、強がってみせる。よい反応だ。忍は恐怖し、それを克服するしなければ務まらないのだ。一人、ガッツポーズで喜ぶなど知ったことではない。

「よし、言質取った！」

物騒な言葉にカカシは小さく溜め息をついた。

意外性No.1の忍に、うちの問題児二人と年相応な普通の女の子一人。出来れば、普通の下忍が四人欲しかったとも思うが、このドタバタに慣れたらきつと寂しくなる。

「んじや、まーよいいスタートの合図で」

そして、始まった。

ババア、サバイバル演習をする(式)

カカシは木の上でイチヤパラを読みつつ、状況の整理をしていた。ビビっていたナルトがカカシの挑発に怒り、クナイを投げつけようとした手をナルト自身に突きつけたこと。それに切れたイルマがカカシに突っ込んでグダグダ演習が始まった事は残念だが皆概ね隠れられる事が出来たようだった。カカシは影分身で周囲を哨戒しつつ、本体は休んでいる。そんな時だった。

「あら？白昼堂々とこんな本を読んで、ダメじゃないですか……カカシ先生」

場違いな、優しい声。

それはカカシの背後から聞こえた。腐っても元暗部の「写輪眼のカカシ」の背を取れる下忍などそうそういない。

一番近い太い枝に腰掛けて、ソレは微笑む。

「お前……何者だ？」

咄嗟に距離を取り、クナイを構えるカカシに対してイルマは茶目つ気たっぷりに戯けてみせた。

「まあ、おおよそは貴方のご想像通りでしょうね。私の名前はこれまでもこれからも一人だけなんで」

「お前、本当にうちはイルマか！」

歴史上では、うちはイルマは、「うちはの阿修羅姫」とも呼ばれた女はマダラの裏切りに気を病み、死んだ従兄弟達を探そうと里抜けしようとして二代目火影に殺された。

もし、生きていたとするなら、既に百に手が届きそうになっていてもおかしくない。だが、カカシの目の前にいる人物はどう見積もっても十代の域を越えない。誰かの身体を乗っ取るような、禁術でも使ったのだろうか。

「狙いは、何だ！サスケか？いや、それとも……」

様々な憶測を巡らせるカカシにイルマはパフスリーブから肩を抜き、カカシに見せ付けるように晒した。色々とポロリしないのは、少女の姿だからか可愛らしいキャミソールの所為か。一部のマニア垂

涎の格好だが、問題は其処ではない。

「三代目から聞かされてないので？セ・ン・パ・イ」

其処には暗部の一員である刺青がすっかり主張していた。

「もしや、護衛役か？いや、でも何故」

「九尾とうちはの生き残りですよ？まだ弱い内に睡着けなくなる輩なんて里の内沢山いる、という事です」

ニツコリ。

これ以上ない位の笑顔だ。これは何人か仕留めた表情である。

カカシは身構えたまま、混乱する頭を整理していた。

カカシの知識では、「うちはイルマ」は里を裏切った人物である。しかし、イルマの主張が正しければ三代目はイルマを知り、暗部に置いてナルトやサスケの護衛をさせている事になる。

イルマの腕を斬ったとされている二代目。その弟子である三代目ならば、イルマの人となりも知っていて警護につかせているに違いない。前提条件からして間違っているとすれば、里を裏切ったという伝承も何処まで本当か分からない。

カカシには、イルマという人物が判別出来なかった。

「……もし、これが戦場ならば貴方が遅れて来た時点で未熟な忍は死んでました。時間を違えるとはそういう事であると、貴方は知っていますよね？」

九尾の人柱力とうちはの正統な生き残りを攫うのなら、イルマ一人だって手段を選ばねば出来る。ましてや、四代目と始めて会った時に倒した仮面の男ならば言わずもがな。あの、うちはの目を持つ男は九尾を引き出す事で里を襲い、シスイの瞳でもってうちはを襲った。

イルマは常に警戒していた。

更に、戦とは力と力のぶつかり合いだ。それが侍であれ、忍であれ、大砲であれ、チャクラであれ、結局はどちらの力が片方を押し切れれば負ける。故に、戦場で一番大切なのは機を読むこと。

頭を潰す事で相手の威勢を削ぎ、集団としての纏まりを失わせてから各個打破が定石。策によってはわざと遅らせる事もあるが、経験のない下忍引き連れて下手を踏む事もない。ぶっちゃけ、出来るなら尾

獣玉のような遠距離攻撃や呪印でじわじわ削ればいいのだ。

「貴方は、コレで部下を死なせたも同然。回顧より目の前を見てもらわないと困る。重ねて言うと、その眼ー」

紫水晶の眼が細められた。カカシの隠された眼を痛ましげに眺めて、続ける。

「合ってませんね。血縁関係のない人間の眼ですか？それもそのチャクラはうちの眼」

「親友の眼だった」

カカシの返答にイルマは頷いた。

イルマはうちは一族が嫌いだった。高慢で他族の血の混じった同族を蔑み、そのクセ、力のある者に阿諛追従する。マダラを追いやった事を許せはしなかったし、これからも許す気はない。今のうちは一族には関係ない話だが、時折見せる「うちは」らしさが鼻についてののも事実だ。

それ故、うちはの眼を、うちは以外に託せるような子孫がいた事を喜ばしく思っていた。思いながらもその子孫とは会えないことが悲しい。

「……まったく、何処ぞの仮面の男に爪の垢を煎じて飲せてやりたいものです」

そう独り言を呟くイルマを、カカシは警戒を緩める事なく見つめた。そして、不意に疑問が口をついて出てくる。

「お前は……いや、貴女は何故、里を裏切った事になっている？それにうちはマダラの従姉妹なら、なんで今も里に従っているんだ？」

「老婆心ながら、申し上げましょう。我が子を愛おしく思わぬ親が何処にいます？」

里を裏切った女にしては、随分と情の深い言葉である。鬼子母神もかくや、という穏やかな表情で微笑む。だが、忘れてはならない。如何に柘榴を食もうと子等への想いが深かろうと鬼女は鬼女なのだ。むしろ、裏切られても尚誰かを愛する様が狂気の所以かもしれない。「コレは宣戦布告です。もう一生遅れて来られぬように、そのプライド折らせて頂きます」

カカシは思わずクナイを投げた。けれども、イルマがいた場所にはカラスが一羽残っているだけで、そのカラスもアーホーと一声なくと飛んでいってしまった。

残されたカカシは、拳を握ると額当てを上げる。

「……久々にオレも本気出すか」

*

イルマが言った通りの展開に、サクラはカカシに同情を禁じ得なかった。

始まる前に、イルマは「カカシ先生、下忍だからって舐めてるみたいだし、本気出してもらえるように頑張つて煽るね」などにこやかに言っていたが、どんな非道な事をして本気を出させたのだろうか。カカシの隠れていた方の眼が露わになっている上、妙に殺気立っている。肩に乗っかっているのはトリの落し物なのか、なんだか白いのが付いている。それも殺気立つ原因の一つだろう。

「イルマさん、凄いわ……」

サクラは呆れと尊敬の念を覚えた。よもや、カカシもサバイバル演習で糞害に会うとは思ってなかったに違いない。

しかも、まだ始まったばかりだ。サクラは茂みに隠れたまま、合図あるその時を待った。

*

木々生い茂る森から少し離れた平原に一人立つ。見晴らしの良い場所は一対複数の戦いには不利だが、本来ならば下忍が束になってもカカシには勝てない、そういうものだ。それを全てイルマという例外がカカシの調子を狂わせている。

だが、何時、イルマが襲いかかってくるか分からない現状を打破する為には写輪眼を使わねばならず、写輪眼を使う限り短期で終わらせなければ、カカシが持たない。

「何処だ…何処にいるー！」

カカシは周囲を見回す。

イルマもうちはだ。

伝承では専らマダラの片腕として補佐をしていたというが、写輪眼

持ちならば話は別だ。同じ写輪眼使いなら、当然生来の持ち主であるイルマの方が効率良く使えるだろうし、ムダなチャクラを食うこともないだろう。

まず、茂みから飛び出したのはワンピース姿だ。クナイを投げて牽制するソレにカカシは本気で掛かった。

「お前、ナルトか」

しかも、分身と来た。

猪突猛進なナルトが分身のみを陽動に使う辺り、誰が忠告したかよく分かる。イルマにナルトを傷付ける気がないのがよく分かる。

下忍と上忍だ、そう長持ちするものではない。変化を解いたナルトはもう一度クナイを投げた。見当違いに飛んで行ったクナイを無視して、カカシはナルトの分身を幻術で鎮圧する。それに合わせて、クナイに変化していたイルマとサスケが術を発動させた。

「火遁・豪火球の術！」

火遁がカカシ目掛けて飛んでいく。それを難なく避けるカカシにイルマはあの悪ガキめいた笑みを送った。

「風遁・断卷たつまきの術！」

サスケの火遁を巻き込みながら、風はカカシを取り巻いていく。逃げようにも、土の中からカカシの足を白い手が抑える為にそれも叶わない。

影分身のイルマさん、三時間待ちの努力の賜物である。

「なっー！土遁か」

カカシは千鳥を地面に叩きつけ、手の拘束から逃れると渦から抜けるべく跳躍した。炎と風の刃はカカシを逃さまいと渦を巻き、徐々に狭まっていく。一人しか抜けられぬ竜巻から抜け出る事でいっばいのカカシはすっかり忘れていた。

これが、サバイバル演習だというコトを。

清涼な音が、響く。

カカシの身体から紐の切れた鈴が離れていく。

「しゃーんなろー」

サクラは貯めていたチャクラというチャクラを脚に使った。一瞬

の瞬発力さえ高まればいい。目指すは、風で断ち切られた紐と鈴三つ。

「討ち取ったり!」

サクラは鈴を掴んだが、バランスを崩す。あわや、地面に叩きつけられるかと思いきやナルトがスライディングでサクラを庇った。

「サクラちゃん、大丈夫だった?」

「……有難う、ナルト」

英雄は遅れてやって来る、そういうものだ。サスケは鈴を握ったサクラごとお姫様抱っこをすると、カカシから距離を置く。

「サクラ、離すなよ」

「はい! (メルヘンゲッター!)」

それが鈴を守るものだとしても、サクラの小さな胸がときめくのは当然だろう。

折角助けたのに美味しいトコロをサスケに取られ、不貞腐れたナルトはサクラ達から目を離す。そして、カカシの上にイルマがのし掛かり、クナイを突き付けているのを見た。

時計のベルが12時丁度を告げる。

*

後ろ手に縛られ、腹ばいになったカカシは囚われの姫君よろしく転がっていた。

「さて、カカシ先生はこれから物理的に落とすからいいとして……」

「理不尽!」

喚くカカシを椅子にして、イルマは肘を膝に置き、頬杖をついた。

「サクラちゃん、今回はカカシ先生から鈴を取ることが出来たけど、これが一人だったら出来たかな?」

「ムリです」

サクラは鈴がカカシから離れるまで、ずっと見ていたので知っている。

ナルトの変化を皮切りに、一対複数で掛かってもカカシは簡単にさばいていた。体術・幻術・忍術、そのどれをとっても下忍が敵う訳がない。不意をつく、なんてレベルではないのだ。

「……そうですね。カカシ先生は手を抜いてくれましたし、これはあくまでも演習です。この演習の真の目的は？」

ナルトやサスケに話を振れど、二人とも答える事はない。急に真の目的は？などと問われても分からないのだろう。イルマは少し低い声で話し出した。

「例えば、これが任務だとします。鈴三つは巻物なりだと考えて下さいーさて、これを敵から奪わないと任務完了にならず、一人死にます」

風が止んだ。

舞い上がっていた木の葉が落ち、土が崩れる音が響く程に辺りは静寂に包まれる。

なんとも血生臭くおどろおどろしい話だ。しかし、忍とはそういう存在である。闇に隠れ、影に紛れて、人を欺く。

「任務を受けなければ里の皆が危険に晒されます。だから、任務を達成出来ない人間は仲間を助けられない人間より、責められる」

サスケもサクラも、ナルトも息を呑む。けれども、一番大きい叫びを呑み込んだのが誰だかイルマは知っていた。椅子代わりにしているのだ、当然だ。

「けれど、私から言わせれば仲間を守れない奴は……もはや、人間ではなく、何時かは捌かれる血と肉でしかない」

塗炭の苦しみを吐き捨てるように、イルマは呟いた。その瞳は悼む思いが蝕んでいるのではないかと錯覚してしまうほど冷たく冴えている。何も救えぬかつての己を卑下する様でもあった。

「ましてや、守ろうとせずに動かない奴なんて尚更です」

「ネエちゃん……」

ナルトは泣きそうな表情のイルマを見た。今は本当にイルマの言う事が理解出来ていないのかもしれない。それでも、誰かを守りたいという気持ちは芽生えてくる。他者から憎悪や憤怒をぶつけられて傷ついて来たナルトだからこそ、大切な感情に気付けるのかもしれない。サスケもサクラも、地面を眺めて考え込む。

一生懸命考える若人らにイルマは微笑んだ。

「格上でも協力すれば倒せる事もある。今日の演習で、仲間で任務を受ける大切さは分かったでしょう？」

イルマは話を纏めた。

子供達も微笑む。純粹な表情はこれからいくらでも伸びる若葉を思わせた。イルマは彼らの事を誇らしく感じた。

気分は孫を慈しむ祖母である。

感覚としてはひ孫ナルトと親戚サスの子供ケと二人の幼馴染サクラだ。飴ちゃんでもあげようかしら、とイルマが気を抜いた時だった。

「ぴゃっ」

そんな感動的な場面に水を差したのは、不埒な両手だ。カカシにとっても非常に不本意な結果だった。

柔らかい。

運が悪い事に、縄を解こうともがいたカカシの両手がイルマの太ももを揉んだのだ。タイツとスパッツに包まれてあるとはいえ、実年齢はともかく乙女の柔肌に触れたのは確か。

顔を真っ赤にしたイルマの瞳は、怒りで潤む。

「よし！お姉ちゃん、この間漫画で見た機矢滅留キヤメル・苦落血クラッチでも試してみようかなー」

イルマはカカシの顎の下に両腕を差し込むと、丁度、腰の辺りから後ろへ海老反りになるように無理矢理引いた。

「痛い痛い！人間は逆には折れないから！背骨折れるって」

カカシの抵抗など全く気にせず、イルマは歌う。

「うーでーがピヨンと鳴るウー」

「それ、違う漫画だってばよ」

ナルトの突っ込みもなんのその、イルマはカカシを弄るのをやめない。一つには、単純にイラつとしたから嫌がらせがてら……という事もあるが、此処でカカシが痛い目にあわないと後が怖い。

主に、某お偉いさんとか。

それでも、ちよつと仕事が増える程度だ。木ノ葉の利益にならない事はあまりしない。これがイルマの旦那様だったら、取り敢えず死地に送らせること間違いないだろう。冷静でいて、意外に私情を交える

人間なのだ。

くわばらくわばら。

そうして、サバイバル演習はなし崩しで終わった。

「あ、私、この後ちよつとカカシ先生に用事があるので。皆さんはお先にお帰り下さい」

しかし、カカシの受難は続く。

カカシ改造計画

どうしてこうなった。

それが、カカシの正直な気持ちである。

ナルト達に上忍として忍が如何なるものか、サバイバル演習によって実感してもらおうと思った。カカシが親友から受け継いだ忍としての心得を、ナルト達が少しでも感じてくれればと考えていた。しかし、それも全て一人の闖入者に覆されたのだ。

うちはイルマ。

同姓同名の別人かと思えばなんとかつて里を裏切った大罪人本人で、しかも上層部は知っていたのだから呆れてしまう。

頭を抱えて悩みたいところだが、今のカカシにはそれすら出来ない。何故なら、カカシの両手は診察台に縛り付けられているのだから。

「さて……準備の方は整いました」

白衣にマスク、珍しく右手を露出させているのはチャクラメスを使う為だろう……ここらが年貢の納め時かもしれない。

カカシは目蓋を閉じた。ほんの少し前をおもいだしながら。

*

イルマに引き擦られる様に立たされたカカシは火影執務室へと飛んだ。その内側と外側がくつつき、裏返る様な感覚をカカシは知っていた。

飛雷神の術。

四代目火影が得意とした術をこうも易々と扱うのだ、流石うちとは感嘆すべきなのだろう。けれど、腹の中で巣食う何かがイルマに反感を覚えさせていた。カカシはその混沌とした感情のまま、三代目に跪くイルマを眺めていた。

「三代目、対象者二名の戦力を確認しましたーCode:「渦」は多重影分身、Code:「トマト」は火遁等の忍術と体術が得意ですがど

れもお遊びの域を出ません。ですが、どちらにも伸びしろは十分あります。子供である事を鑑みて、適切な指導をして下さる方をお願いします」

「分かった。その人選は此方で手配しよう」

三代目はイルマに鷹揚な態度で答えた。その如何にも信頼し合っているという感が、カカシの苛立ちを煽る。そもそも、正式に説明された訳ではないのだ。

「また、「左」と「兄」の使用許可を申請致します」

「……ほう。して、それはカカシの為か」

三代目との話題が自分に移った事を知ったカカシはイルマを一瞥してから、三代目に話し出した。

「三代目！先程から全く事情が読めないのですが。せめて、説明をして下さい」

三代目はイルマに話すよう促すと、側にいた暗部を人払いの為に下がらせた。イルマは何処かで見事のある仮面の暗部が完全に立ち去るのを見送ってから、口を開いた。

「うちはマダラを知っていますか？」

思いがけない名前にカカシは面食らった。

初代火影・千手柱間と手を結び、里を作り……そして、里を裏切ろうとして柱間に殺された男だ。この話は木ノ葉の人間ならば誰でも知っている御伽噺でもあり、歴史でもある。

何故、この場でそんな男の名前が出たのだろうか。

カカシの反応からイルマは理解する。

「知っている様で良かったです。彼は私の従兄でしてね、お兄様……柱間に殺された事になってます。公的には」

イルマは右手で左肘に触れた。無意識なのか、不安げに視線が彷徨う。伝えて良いものなのか、思い巡らせているようだ。

一つ息を吸って、イルマは一気に吐き出した。

「ですが、マダラは生きていたのです」

「なっ！そんな筈ないだろう！」

カカシの苛立ちと驚愕の混じる声にイルマは首を振る。忍の神と

謳われた千手柱間と、その弟千手扉間は忍としては最高の存在であろう。それでもその目を欺けない訳ではないのだ。

「確かに、柱間殿と二代目と私とその死体を確認しました……でも、残念ながら幾つか、仮死状態になる方法はありません」

イルマは多くを語らない。語りたくてもうちはの瞳についてイルマも断片的にしか知らないのだ。それでも僅かながら聞き覚えている事もある。

秘術・イザナギ

事象を捻じ曲げ、術者の意の儘にする禁術だ。うちは一族の秘術であり仲間同士の殺戮の要因であり、己が眼を潰して行使する諸刃の剣である。その禁術をうちの寵児たるマダラが使えない訳がない。

他にも方法がない事もない。そのどれを使ったかは知らないが、マダラは見事千手を欺いたのだ。

「二代目に切られた後、私は死体を燃やすべく、マダラの処へ飛びました。悪用される危険もありますが、何より木ノ葉の未来の為に安らかに死んで貰いたかったのですーでも、彼は生きていた」

イルマの脳裏に最後に見たマダラが映る。涙を流して、イルマの名を連呼するみっともない姿を。いつもボサボサの髪が更に乱れ、端正な顔も酷い有様だった。

優しい男だからこそ、歪んでしまったのだ。もし、誰かがマダラに寄り添い支えてやっていたら世界は変わっていたかもしれない。

「では、裏切ってないなら……何故、二代目は貴女を切ったのです？マダラを止める為なら反対する謂れもないのに」

カカシの疑問は当然だ。里に対する脅威への対処なら、足並みを揃えるべきなのに味方である火影直々に手を下されるなどおかしいに決まっている。

イルマは肩をすくめた。

「私はうちはイルマ。何処に嫁いでもうちはの女です。イズナの眼を手にして第二のうちはマダラになられたら困りますから。結局、二代目はうちの私を受け入れたくなかったのでしょうか」

嘲るイルマを三代目は悲しそうな表情で眺める。イルマの事も二

代目の事も知っているだけあって、思う節もあるのだろう。だが、それを口にする事はない。

賢者は知っているからこそ黙るのだ。

「私がこの時代へ飛んで来たのは、一つ、うちはマダラから木ノ葉を守る為。二つ、うちは一族をフルボつ…ごほん、あのムダに高い誇りを根底から折る為。そして、忍の強化と連携を高める為、です」

イルマはそれだけ言うと、にっこり微笑んだ。たおやかな乙女の様でいて、見る人が見ればやっぱり何人が殺している笑顔である。

「さあ、お付き合いをお願いします。カカシ先生」

*

そして冒頭に戻る。

カカシはまな板の上の鯉ヨロシク手術台に括り付けられていた。「根」の拷問部屋の隣、処置室である。消毒薬と薬品…たぶん近くにホルマリンプールでもあるのだろう。の臭いが漂う陰気臭い部屋だ。

処置室本来の使い方であると処置室からマトモに出られた人間は殆どいないが、イルマは本当に手術の為に使うらしい。らしい、というのは憶測と推定で実際の所は分からないという意味だ。第一、イルマ自身が手術をすると言うのも初耳で、これが拷問でない事を祈るばかりだ。残念な事に、拷問器具が揃っている。そして、もしイルマが医療忍術を扱えるならば拷問など容易く行える。治す事は壊すよりも難しいのだ。

また、如何に三代目火影他上層部が信頼しているとは言え、真実を知って半日も立たぬ内にイルマから改造されるなど何処の誰が想像出来よう。ましてや、カカシの眼はカカシだけのモノではない。

カカシは両目蓋をしっかりとつむった。

「はい、目蓋開けて下さい。麻酔させないと痛くて痛くて死にますよ」
「待って下さい。まず、これは何をしようとしているんですか？イルマ様」

これは、英雄になったオビトの眼だ。オビトを奪われて、リンを目の前で失った痛みを全部見てきたかけがえのない存在だ。そんな眼

をそう易々と傷付けさせたくはない。

これはカカシの小さな、けれど立派な抵抗だった。

「カカシくん？」

「嫌です。説明してくれるまで抵抗します」

イヤイヤと、首を振って目蓋を開ける事のないカカシはまるで子供のようだ。手術台に縛り付けられているから余計、そう映る。それでも、ぽつと出の素性も不確かな相手に「強くなれるから」とついて行ける程幼くもないし、力を渴望する程貪欲でもない。

急ぎ過ぎたか、とイルマは反省し、手術台に寄り掛かった。

「強化の一環……と言えいいかしら？その左眼は貴方のチャクラ循環を妨げていますから、貴方と左眼が馴染む様に細工をします」

「具体的には？」

「里で秘密裏に開発している細胞シートを少し埋めます。痛みも眼球への損傷もありません。多少の違和感はあるかもしれませんが、それも直に慣れるでしょう」

カカシはイルマの言葉を反芻する。何かは分からぬが、火影の許可を貰わねばならない様な技術を使ってまでカカシの強化させようとしている。これまでのイルマから見て、カカシをムダに傷付ける事も写輪眼を手にするべく騙そうする可能性も薄い。写輪眼の事を抜きにしても、カカシは有能な忍だ。今ここでカカシを潰せば、ナルトやサスケを守ろうとするイルマの努力は全て水の泡になるだろう。

成る程、イルマはカカシを本当に助けようとしているのかもしれない。だけれども、それでも疑問は残る。イルマが恐れる相手に関してだ。

「何故、其処までしてオレを強化させようとする？うちはマダラが生きていたとしても相当な年寄りか寿命で死んでいるか、のハズ」

他に警戒する相手はいるのに、いつまでマダラを恐れるのか。イルマ自身が未来へ来られたからマダラも同様だと思っているのだろうか。

だが、イルマの言葉はカカシの予想を超えていた。

「この時代に最初に来た時、私は四代目火影の最期を看取りました

……九尾を里に口寄せし、四代目火影とその奥方を弑逆したのは、仮面のうちはだった。既に危惧していた通り、マダラの意思を継ぐ者が現れているということですよ」

静かな声だけが響く。

冷たいリノリウムの床やタイル張りの壁に反響して、無機質な蛍光灯の明かりと共に落ちてくる。

イルマの声は、微かに震えていた。其処にあるのは怒りと哀しみと、血族に対しての諦念だ。うちはの人間が木ノ葉にどれだけの迷惑を掛けたか分からねども、その幕引きはせめてうちはの人間がすべきであろう。

しかし、いつまでもイルマが居られる訳でなし、今後の憂いを断つ為にも、木ノ葉の人間を強くしていきたいのだ。

「それに、うちはの人間が眼をうちは以外に渡した意思を尊重してやりたいのです。写輪眼は酷使すればするほど、磨耗して視力が落ちて最終的には失明します。其れ左眼にしても不本意でしょうし、其れも貴方の目となつてまだ世界を見て行きたいでしょう」

サバイバル演習でカカシを煽ったのは、何も本当にプライドを折りたかっただけではない。カカシの身体を巡るチャクラの流れを感じしなかったのだ。結果としては想像通り、カカシはチャクラの大半を左眼に奪われていたいたし、全身を巡るチャクラの流れも悪くなっていた。

反則でもなんでもイルマは、カカシの左眼をカカシが上手く使えるようにしてやりたいのだ。

カカシは恐る恐る目蓋を開いた。イルマはカカシの方を向いて、優しく微笑んでいた。そんなイルマの気安い様は、誇り高きうちはらしくなく、まるでオビトを思わせる。それがカカシの調子を狂わせる要因なのかもしれない。

「……お手柔らかに頼みます」

イルマはカカシの左目蓋を固定すると、目薬をさした。二度三度冷たい液がカカシの左目に入っていくのを確認し、右手にメスを持つ。サクツと。

眼球を0.0数ミリ切り、その僅かな隙間に皮膚よりも薄く小さい「左」と「兄」と呼ばれる細胞シートを入れた。ついでにチャクラを針のように尖らせ、感覚で経絡を刺激する。今はまだ入れたばかりの細胞片もそのうちカカシの左眼に根付き、写輪眼の助けになるだろう。「これで手術は終わりです。定着する数年は死にそうなる戦闘以外は使わない様にして下さい。あとは今まで眼にばかり取られてたチャクラを循環させないと」

刺していたチャクラ針を解除、点穴を押さえておく。点穴とは、即ち急所。往々にして急所は優しく触れば気血水のバランスを整える事が出来る。身体に張り巡らされた経絡系の澱みを取るように揉みほぐせば、カカシの手足はだいぶ温かくなってきた。

……其処までは良かった。

イルマもカカシの強張りが取れて行くのが文字通り手に取る様に分かって楽しかったし、カカシも身体の調子が良くなるのを感じていたから。

ただ、詰まっていた管を押し流せば何処かからゴミが出てくるのは必然で。

「ギィヤー」

イルマは叫んだ。

カカシの黒いマスクが、真夏の深夜番組ばりに血塗れになったのだ。一言で言えばスプラッター、違う言葉で表すなら、ゴア表現である。

イルマが乱暴にマスクを剥がせば、スツと通ったの鼻から流血していた。しかも、両方の鼻の穴からだ。それでも、何故か格好良いのは顔立ちが整っているからだろう。

イルマはカカシの鼻に脱脂綿を詰めると、医療用の白いマスクを付けてやった。武士の情け、ならぬ忍の憐れみだがイルマ自身の為でもあった。

カカシの素顔は、目の毒だ。

既婚者のイルマですらちよつとよろめいたのだ、これが其処らのお嬢さんならイチコロで落ちる。いつそ、写輪眼よりも光るフエイズ・フラッシュユ 貌で戦

えるレベルだ。ドブ川を清流に変えるに違いない。

イルマは顔にまで飛んだ鼻血を拭きながら、白衣を脱いだ。

「若さにかまけてメンテナンス怠ると後が怖いですよ。私で良ければ時々食事作ります」

カカシ、夕食ゲット。

それから時々食材を持ち寄って、イルマの家に集まる七班が見られたという。

波の国編

ババアと大工

光があれば、闇が出来る。

輝かしい太陽の下ですらそうならば、薄闇の中の闇はどれほど色濃く染まっているのだろうか。ましてや、闇に溶けて生きる忍の隠れ里ならばその闇は口にするのも恐ろしいに違いない。此処、木ノ葉にも闇はある。青々と葉を広げる木ノ葉大樹を支えるのは、何時も隠れた「根」なのだ。解体されようが、光ある限り闇は残るものだ。

今日も深い奥底で、闇が蠢く。

*

「はい、第一回「根」に欲しいモノ主張大会を始めます！」

気怠そうに手を挙げた狐面に、その場にいた面々は溜息をつく。無駄な感情を捨てよ、と教えられる暗部の「根」に於いて、狐面の少女は感情豊かだった。それでも、彼女の実力は折紙付きで「根」の長・志村ダンゾウからも一目置かれているのだから不思議だ。

「日夜、木ノ葉の為に働く我らの為にダンゾウ様直々に願いを叶えて下さるそうです。自由と平穏と賞与、休暇以外で何かありますか？」
上がっていた手がバラバラと落ちていく。表だろが裏だろが、忍に休みなどある筈がない。それでも、一縷の望みに掛けた猛者達の断末魔がそこかしこに聞こえた。

お休み欲しい。睡眠時間が欲しい。任務変わってほしい。

「彼女が欲しい！」

「他人と目を合わせて話せるようになってから出直せ……はい、次」

「彼氏が欲しい」

「さっきの奴と付き合え……はい、次」

「嫁が画面の向こうから出て来てくれません」

「それはお前の嫁じゃない。私のです。あと、サイに頼めば未来が見えます……はい、次」

テンポ良く、狐面は司会進行していく。そのどれもが欲望に塗れた

願いである。感情を抑えた故の弊害だとしたなら悲しい話だ。

そんな中、一人黙っていたフーが真っ直ぐ手を挙げた。

「我々「根」の者は後ろ暗い仕事が多い。何かと血生臭い、嫌な事ばかりだ」

暗殺。謀殺。流言飛語で世論操作し、木ノ葉の為に暗く働く。まさに忍という存在が「根」で有る

だからこそ、今、力を込めて言う！

「専用の風呂が欲しい！」

フーの意見に隣のトルネが拍手をした。何せ、怪しい実験室や何が入っているかも分からないホルマリンプールは沢山あると言うのに、おぎなりなシャワー室が一つあるだけだ。それも至る所にカビが生えているし、男女分かれてないせいで三つあるシャワーは大体女性優先で入っている。

つまりだ、大多数の男性陣は血塗れだろうが水塗れだろうがナニに塗れていてもシャワー室に立ち入れない、ということだ。まかり間違つて中に入り、女性が何処かでシャワーを浴びていたら死より恐ろしい目に遭わされる。というか、先日無謀な若者がリアル刀の錆になったので同じ轍は踏みたくないのだ。

「普通の風呂屋でも血だらけは嫌がられるし、そもそも我らは保育士でもある。孤児院の風呂なんか使えるか！」

「……一理あるな」

フーの言葉に頷いたのは、一人の子供。狐面の膝の上でくつろぎ、偉そうに踏ん反り返っている様に見える男の子だ。短い黒髪を狐面に撫でられ、抱き締められている。

彼こそが忍の闇と恐れられている男、志村ダンゾウである。偉そうではなく、実際偉いのだ。踏ん反り返っているのはお腹の辺りを後ろから抱えられているから。時折、狐面のささやかな膨らみが頭に触つてしまうのは公然の秘密だったりする。ちなみに、当の本人である狐面としては変化の術様々で気にしていない。好きな女に抱き締められる為には変化の術で子供にならねばいけないという複雑な男心も、嬉しそうな狐面の姿を見てしまえば俄かに消え失せてしまうから不

思議だ。

つまり、今、志村ダンゾウは満足していた。暗部であれば上層部が狐面の女に弱いのを知っていたし、特に普段気難しいダンゾウが狐面一人与えるだけでこんなにもご機嫌でいられる。おねだりには丁度良いのだ。

「では、今は使われていない第20実験室のホルマリンプールを……」
「却下！ダンゾウ様、オレらはまだ死んでません！」

否定の声にダンゾウは頬を膨らませた。どうせ何時かは入るのだから予行練習で使えばいい、と言わんばかりだ。幼子が頬を膨らませる様はとても愛らしいが、中身を思えば恐ろしい。

そんな恐怖などどこ吹く風で、狐面が口を開いた。

「いつそ、里の外れに宿でも作りましょう。従業員用の風呂を大きく作れば使えますから」

宿を作る、とは言葉通りの意味だ。引退した忍の雇用先であり、情報を入れるのに宿屋は最適なのだ。そして、外貨を稼ぐ手立てにもなり得る。里が人員を管理すれば抜け忍をしにくくなるというものだ。

「お風呂屋さん作ってもいいですけど、里内だと既に幾つかありますし。既存の銭湯の営業利益を守る為にはお宿の方がいいかなーと思っただけで、ダンゾウくんはどう思う？」

「コハルやホムラを巻き込むでしょう」
「うん、じゃ、宿のコンセプトや見積り立てておきますね」

狐面はダンゾウの身体を抱き直す。可愛くて仕方ないようだ。それを周りは生暖かく見守る。今日もこうして「根」は平和なのだ、六道仙人辺りにでも感謝しておこう。

この狐面が暗部の一員になってから12年ほど過ぎた。長期任務で居なかつた時もあったが、狐面の女が来てから暗部は劇的に変化したと言える。

まず、孤児院。

大戦や九尾の件で身寄りをなくした子供達を丁重にお迎えした。親兄弟、一族郎党失った子供を今までの様なおざなりな養育ではなく

ちやんと育てる様にしたのは一つは治安維持の為。もう一つは戦力の維持の為である。

戦時下或いは、里内での混乱状態に於いて子供は一番狙われる対象になる。他里や希少な血族の子供を狙う人攫いが横行し、実験に使う血肉として狙われるのだ。純粋で弱く抵抗出来ない子供だから価値があり、狙われる。

時には、子供同士で徒党を組み抵抗をするかもしれない。生きる為には喰わねばならない。どんなに嘆いても涙を流して叫んでも、生きている限り腹は減るし、喉は渴く。餓える子供らが食べ物を得るには手段を選べないのだ。治安悪化の悪循環は止まらない。それを防ぐ為に、食べ物と清潔な寝床が必要なのだ。

次にしたのが、雇用の確保だ。

基本的に忍は己が身体一つが資本であり、怪我や病気で働けなくなったらおしまいだ。これが日向や奈良の様な有力な一族なら後進の育成や持てる技で生計を立てる事も出来るだろうが、一般家庭出身なら死を覚悟で戦場に行くか、さもなければ仲間か情報か、他里に売るか。忍を辞めても生業があれば抜け忍も減るといふもの。おまけに里の内外の店に元忍を置くことで、情報収集も前より楽になった。

孤児院の再編と雇用先の斡旋の共に言えるのが、戦力の確保である。

子供とて数年経てば大人になる。かつての子供が大人になり、子供を育む。こうして生命は繋がれて行く。ヒトであれ、動物であれ、その流れは変わらない。だが、戦時に備えた場合、一定数が死ぬとして想定すると次代へと繋ぐ人員や後方支援の非戦闘員を確保が課題になる。

金の工面は如何様にでも出来る。だが、兵卒の頭数を揃えるのはそう簡単に出来る事ではない。練度も関係してくるのだから、尚更。勿論、それだけが目的ではないが。

現に、暗部「根」に所属していた殆どが孤児院出身で、表向きは孤児院の職員という事になっている人間が多い。フーヤトルネの様に有力氏族出身者が暗部「根」にいるのも、少しでも里の団結を高める

ため。

全ては里の為だ。

ちなみに、狐面は暗部でも仮面を外さない上に上層部も仮面を外すような任務に当たらせないので素顔を知る人間はいない。噂では、初めて暗部の一員になってから全く姿が変わってない事から実年齢はダンゾウよりもずっと高く、六道仙人の御代より生き延びているとか何とか。その所為で密かに「夜の女帝」「闇ババア」呼ばわりされていたりする。まあ、あたらずともいえど遠からずと言ったところだ。

喧々諤々、様々な意見が飛び交い、入り乱れる。それを半ば聞き流していた狐面が手を叩いて静止させた。

「では、そろそろ纏めます。専用のお風呂は、まず里の外れに宿を作り、その中のを利用しましょう。計画が上手く行くまで、うちは居留区の風呂を使わせて貰えばいいでしょう」

そう告げれば、軽い笑い声が出た。スツと手を上げて答えたのは、微笑みを絶やささない悪意のヒトだった。

「うちは自治区？そんな処に勝手に入ってもいいのかな？ところで、千、さつきからキミの貧相な胸がダンゾウ様の頭に擦ってるよ。もしかして、欲求不満なの？」

「きちんとお金を払えば、彼らも嫌とは言えない筈です。先立つモノは必要ですから。あと、三次元のCカップはこんなもんです。サラシで潰れますし、乳袋なんぞムリに作らないと出来ません……現実を見ろ、コミュ障」

「へー欲求不満は否定しないんだ」

狐面の嫌味にも負けずに、サイは呟く。片目をまん丸にして見上げるダンゾウ他一同、顔を赤らめて一点を見つめる。狐面はその耳を仮面の覗と同じ朱に染めて、押し黙った。今は何を言っても逆効果に思えたのだ。狐面は膝からダンゾウを下ろすと、小さな煙と共に消えた。今までの狐面は影分身の術だったのだ。戦略的撤退である。

ダンゾウが元の姿に戻るまで、騒然とした空気は変わることなかった。

*

「だから！オレってば、こんな任務じゃなくて、もっとスゲーのがしたいんだってばよ！」

毎日のネコ探しや雑草取りと言った雑事に飽きたナルトの叫びだ。その元気な声に、イルマは微笑む。生まれたばかりで、オムツを変えたりミルクをやったりしていたナルトがこんな言葉を言える位大きくなったのだ、感慨も一入ひとしほである。カカシなどは冷や汗をかいているが、よくよく見るとサスケもサクラも内心はナルトと同意見の様で雑事にうんざりしているようだ。

第7班は里でも特殊な存在ばかり集められている。九尾の人柱力のうずまきナルト、うちは一族の生き残りであるうちはサスケ、お目付役としては写輪眼のカカシにうちはイルマと来ている。春野サクラという精神安定剤がなければ濃すぎるメンバーだ。原酒はそのままだとキツイだけである。

その第7班を上手く育てれば里の戦力として大いに役立つし、失敗すれば惨憺たる結果を残す事になるだろう。その運用は全て三代目火影の手に掛かっているとも言えよう。

一方、三代目火影は悩んでいた。

忍の任務はランク分けされており、ペーのペー、下忍成り立てのナルト達はDランクの雑事が相応しいのだ。そも、Dランクと馬鹿にしてはならない。家事手伝いで身体を鍛え、子どもの面倒に慣れる事で、要人のご家族であれ丁重に扱える様になる。心持が変われば、全ては修行になるのだ。

しかし、「可愛い子には旅をさせよ」とも言うし、ナルト達の成長は凄まじいものを感じさせる。それに何よりイルマがいる。最近流行りのモンスターペアレントならぬモンスターババアの、過保護でいて忍術や体術に関しては厳しい師匠になるイルマが。

猿飛ヒルゼンが幼少の砌には隠れ鬼や鬼ごっこ等をして遊んだものだが、隠れ鬼は隠遁する時の経験になり、鬼ごっこは追手の撒き方、撒かれぬ追跡の仕方を学んだ。他にもウサギや鳥の仕留め方など

遊びから学んだ方法はその後の人生に強く影響を与えている。

幾度となく大戦を経験しているとは言え、磐石な里に生まれ育ったヒルゼンと生まれてからずっと人を殺す事を叩き込まれて、それを実行してきたイルマ世代とは覚悟も何も土台が違う。きつとイルマは平和な時代に生まれたナルト達の平和そうな様子に喜びを覚える半面、もつと鍛えねばと危機感を覚えているだろうから。

「あーあーじいちゃんはいつも説教ばかりだ」

座り込み、抗議の体勢にはいるナルトは憤懣を隠す事なく声を上げる。

「けど、オレってばもう……！いつまでもじいちゃんが思っているよなイタズラこぞうじゃねえんだぞー！」

他人との接点をイタズラでしか結べなかったナルトが、言ったのだ。イタズラで自分を表現する事しか出来なかった子どもが己の成長を求め、立ち上がっている。喜ばしいことだ。イルマならば感涙ものであるし、実際カカシの影で涙を拭っている。

この分ならば、大丈夫そうだ。三代目は微かに唇を緩めると、未だ紫煙燻るパイプをふかした。

「分かった。お前がそこまで言うならCランクの任務をやってもらおう……ある人物の護衛任務だ」

ワクワクしてたまらない子ども達に、頬を赤く染めるイルマが涙目で口元を抑えている。

三代目はその反応に手応えを感じた。

最近ではダンゾウばかりがイルマを占領し可愛がられているが、ヒルゼンとてイルマに褒められたいのだ。上層部の老人の殆どが同じ気持ちだと言うのは知っているが、純粋な付き合いの長さで言えばイルマとヒルゼンは一番長い。可愛がられて来た年季が違うのだ。

「そう慌てるな。今から紹介する！入って来てもらえますか」

任務受付の部屋の戸がガラリと開けられた。途端に酒の臭いが部屋一杯に広がる。

「なんだア？超ガキばつかじゃあねーかよ」

現れたのは、酒瓶を片手にねじり鉢巻を巻いた古典的な酔っ払い

だった。背中に背負う荷物やその筋肉のつき方、手指に残る傷跡がその男の職業を物語っている。

大工。

それもかなり腕の立つ大工だ。

「……とくにそこが一番ちつこい超アホ面、お前それ本当に忍者かあ！お前」

その言葉にナルトが憤るも、その疑いも当然だろう。忍だのチャクラだの言われても端からみれば子どもに違いない。だからこそ、忍は怖いのだ。それを男は分かっている。

男は懸命にナルトをたしなめるカカシと宥めるイルマを一瞥し、先程より幾分マシな態度で話し掛ける。

「中々強そうな忍と、可愛いネエちゃんも一緒か。アンタらが主力つて事か？よろしくな」

男の差し出す手をマジマジと眺めて、イルマはその手に触れる事なく一礼した。

「ごめんなさい、私は一族のお墓の管理がありますので今回は行けません。本来の四人一組で任務に当たると思っています」

「……えっ」

「えっ」

カカシの戸惑う声に、イルマも戸惑いの声を上げる。

「えっ？なんで？イルマのネエちゃん」

「え、イルマさん、なんで？」

戸惑いの声が次々上がる中、サスケは一人遠くを眺めたまま呟いた。

「また、シスイさんかよ……」

その声には悔しさと諦めが滲んでいた。

閑話2

「どうしてイルマさんは来なかったんだろう……」

サクラの呟きは何故か大きく響いた。カカシは黙ったまま、サクラの頭を軽く撫でる。カカシはイルマの素性など、口が裂けても言えない。恐らく夢物語だと思われるだろうし、カカシもそれに似たモノだと思っっている。

何というか、イルマは存在が反則なのだ。

「ふむ、本来ならばあの娘っ子も同じ仲間みてえじゃねーか。墓守をする様な大層な家柄なのか？」

依頼人であるタズナは誰ともなく問いかける。それにカカシは苦笑いで答えた。里の人間でない相手にイルマのアレコレを語る訳にはいかない。

そんなカカシの思いとは裏腹に、意外性No.1の忍者はペラペラ喋った。

「イルマのネエちゃんはその処のムツツリと同じうちはの人間だってばよ！でも、なんでサスケじゃなくて、養子のネエちゃんが墓守なんかするんだ？」

その疑問に答えたのは、今まで沈黙していたサスケだった。

「イルマは、元々外部の人間でうちはカガミという男を頼って来た事になってる……でも、たぶん違う」

「違う？」

カカシは内心冷や汗をかいていた。こんな場所で木ノ葉の闇を暴かれてはたまらない。それでも、サスケは淡々と続ける。

「イルマはうちはカガミの孫じゃないか、と言われている。火遁の才能も写輪眼もないイルマが、うちは一族の一員になったのもその所為だ……カガミの孫であるシスイさんの家は今は無いうちは宗家に近い。だから、取り込もうとしたらしい」

サスケの言葉には含みがあった。

おおよその事情を知るカカシにはサスケが何を言いたいかを悟る。

昔の事はいざ知らず、現代でうちはを取り仕切っていたのはサスケ

の父であるフガクだ。フガクの子供は兄であるイタチと弟であるサスケ、二人とも男である。そして、瞬身のシスイは男だ。武勇も名声も信頼もあるフガクの家が名実共にうちのは当主としての地位を築くには不可欠なモノとしては血のみ。

対外的には、イルマはただの孤児だ。その後ろ盾になり、許嫁としてイタチやサスケを当てがえば年の頃合も丁度良い。よしんば、イルマがシスイと結婚する事になってもその子供達を結婚させれば良い。孫の代には、確固たる地位を持つ事が出来るという寸法だ。

全くもって本人が知ったらダツシユで逃げそうな計画である。

「ふうん、ナルホドねえ。ソレ、イルマ本人知っているの?」

「さあな。イルマはシスイさんしか見てないから分からない」

カカシの問いに、サスケは吐き捨てるように述べた。拗ねている様な物言いに内心穏やかでないのがうかがえるが、カカシは知らんぷりを決め込んだ。今はそんな面倒臭い関係に突っ込む余裕などない。

一部始終を聞いていたタズナは酒をあおる。豪快な飲みっぷりは自棄酒にも映る程だ。一瓶を空けると、酒気の帯びた息と共に感想を吐いた。

「あーよく分かんねえが……つまり、あのネエちゃんは養子先の義兄と恋仲で、その男の為に墓守をしているって訳か?」

「ナルホド!」

断片的なタズナの言葉にナルトが納得したように頷いた。あまり良く分かっていなかったようだ。正直、分かる必要もないのだけだ。

「まーいずれにせよ、今回はCランクの仕事だし、さっさと終わらせてイルマに夕飯でも作って貰いましょうか!」

適当に纏めて、カカシは子ども達を連れて歩く。タズナの手が震えている事など気がついていなかった。

*

ナルト達を見送ったイルマは溜息をつくど、一人踵を返した。目的

地は何時もと変わらぬ場所、薬と死が蔓延り懐かしい香りのする病院だった。

適当に変化の術を使い、裏口から入ったイルマは目当ての病室まで向かう。途中、結界の綻びがないか確かめつつ歩む足取りは重い。

「ただいま」

一番嚴重に結界を張り巡らせた部屋に入る。帰ってくるのは重たくなるしい静寂ばかりで、イルマは溜息を禁じ得なかった。かつては野戦病院並みに詰め込まれていたというベッドも、今では数えられるほどしかない。

コレがイタチとサスケ以外の全てのうちは一族だった。

「今日は遅くなって済まなかったですね。ナルくんやサスケくんがCランクの護衛任務を受けて里の外へと旅立ったのを見送りました」

褥瘡が出来ぬ様に特殊なマットレスを引いてはあるが、イルマはそれだけで慢心しない。一人一人の身体を影分身数人で起こし、拭き清め、手術着を変える。カテーテルで繋がれた袋を変え、新しいものと交換する。それから、それぞれに点滴やチューブでの栄養補給などを施して、誰に聞かせるでもなくイルマは語った。

「うちの幼子はこれからドンドン強くなる。それにナルトくんも。このまま順調にいけば将来が楽しみです」

答えはない。

それでも、イルマは未だ眠りに付いたままの人達に話し掛ける。たまには髪を洗って切らないと、など考えながら益体のない話をする。

静けさの中で響くのは、楽しそうなイルマの声だけ。それは酷く虚しい光景だった。正気を疑う光景だった。

イルマは語る。

「嗚呼、それにしても……皆、幸せな夢を見ているのですね」

目を奪われない様に、全ての顔に目隠しと呪を掛けてある。見えるのは口元だけなのに、その唇が緩んでいるのは幻術が今も効いているから。

イルマとて、その幻術に掛けられていたのだから知っている。抗い難い素敵な夢だった。あり得ない、都合の良い夢でしかなかった。だ

から、こうして目覚めていられる。

イルマは飾り気のない無機質な部屋の奥、唯一色のある場所へ移動した。

「シスイさん、聞いて下さい！」

先程よりも明るい声で、話し掛ける相手はシスイ。イルマの姪孫であるシスイは他のうちはより痛ましい姿で横たわっている。うちはシスイは片目を失っていたのだ。

イルマはシスイの側に腰を下ろすと、何時もの様に話し出す。

「全くサイってば酷いんですよ！人の事を欲求不満だの、貧乳だのその他諸々口に出せない様な事を言ってくるんです！……他の子と同じ様に育てたのにどうしてあんな風に悪い口を聞くようになったのでしょうか」

孤児院育ちや、他の「根」の人間はサイとは趣が違った。

フーは山中一族らしく、紳士的で草花にも詳しく女性にもそつなく対応するので人気がある。トルネは奥ゆかしく慎み深いが誰に対しても優しいのでこれまた人気がある。イルマが育てた、と言っても過言ではないシスイもうちはらしくなく、実力と誠実さを兼ね備えた好青年だ。

サイが異色なのだ。

「根」の人間は感情を殺す訓練を受けているが、頓珍漢な対応を取らない様に感情と反応の仕方を学ぶ訓練も同時にしている。そうでなければ、潜入任務をこなせない。それなのに、サイは対応出来ていないのだ。このままでは、初対面の相手に「キミ、タマっているんですか？」とか可愛い女の子に「感じの良いブスですね」とか言い出しそうである……イルマの危惧が間違っていないと分かるまであと数年掛かるのだが。

「でも、そんな風に言われるなんて、私は欲求不満そうに見えますかね？確かにそういうのとはご無沙汰ですけど、必要もないですし」

イルマの記憶を思い返してみても、軽く半世紀近くの時間が経っている。現代に蘇ってから子育てだの暗殺だの鍛錬などでそんなもんに現を抜かす暇などなかったのだから。そして、イルマは未だに夫の

事が忘れられなかった。

「……ダンゾウくんのプロポーズ、受けた方が良かったのかもしれないね。その方が落ち着けていたのかも」

「なん……じゃ……と」

杖の転がる音に、イルマが顔を上げれば青褪めた三代目がいる。独り言を聞かれたのか、とイルマの顔から血の気が引く。二人の視線が合い、すぐさま離れる。

なんとも気まずい空気が流れた。ならば、一応弁明しておこうではないかとイルマは口を開いた。

「私は欲求不満じゃないですからね！」

イルマは声を大にして主張する。そんな主張が耳に痛いのか、三代目はこめかみを揉んだ。この年上のお姉さんは昔から少しズレている。優しいが気にする場所が違うのだ

「問題は其処ではありませんぞ、イル姉！全く、ダンゾウめ。何という命知らずな……二代目様が生きていたら死ぬより恐ろしい目にあっていたというに」

「あの、うちは嫌いよりダンゾウくんの方がずっと可愛いです。マジかわです。まあ、二代目火影の事は嫌いではないですし、今更恨みも何もありませんが積極的に語りたくないのですうー」

イルマは三代目から視線をそらしたまま、頬を膨らませた。二代目火影から彼の弟子達に近寄る度に嫌味や牽制をされた思い出が浮かんでは消える。もつと小さな頃に面倒を見ていたのはイルマだと言うのに、カガミとコハル以外は話す事すら許さなかった。全く理由が分からない。火影に直訴しようにも本人が火影なのだからどうしようもない。

「そんな事より、突然どうしたのです？何時もなら鳥の一つでも寄越すのに……」

此処はあまりにも辛気臭い場所だ。うちは一族の墓場のようなもので、忙しい火影が自ら立ち寄る様な素敵な処ではない。普段なら伝令用の鳥や暗部で呼び出すのに、三代目が来るなど何か裏があるに違いない。身体を硬くするイルマの肩を抑えて、三代目は座らせた。

「イル姉、貴女は少々気張り過ぎる。うちは一族の世話を暗部に任せ
て下され」

「しかし、私は」

「これは火影としての命令じゃ。うちはイルマ、休め」

イルマはうちは一族が嫌いだ。

でも、それはイルマを、マダラを切り捨てのうのと生き恥を晒し
ていた傲慢な輩が嫌いなのであり、その子孫である今の「うちは」一
族とは関係のない話だった。生きようが滅びようが、里にさえ関係し
ていなければ興味のない事だった。

視界の端に映るのは白い病室と広がる寝台だけ。何人が死んで何
人が今も息をしているのだろうか。イルマの無関心さがこの光景を
作ってしまったのだ。シスイを守り、もつとうちはを気遣ってやって
いれば笑えたのかもしれない。

可能性を語れば終わりはないが、少なくともこんな寂寞とした感情
に振り回される事はなかったろう。

「……歯痒いのは分かる。特に貴女は九尾の時もうちは一族襲撃時も
その場に居合わせていたのだからな。だが、だからこそ、休める時に
休んでおかねば」

「分かりました……お願いがあるのですが、聞いて頂けますか？」

控えめなイルマの声色には悲壮が滲む。うちはの血を裏切るうち
はの女だ、それも彼女が望んで裏切った事など数える程しかないとい
うのに。三代目は同情を禁じ得なかった。

「ワシで出来る事ならば良いが」

イルマの腕が三代目の胸に絡みつく。縋り付くようなそれに、三代
目が慰めるべくイルマの肩を抱こうとした時だった。

「貴方もたまには、小さな頃の姿になって下さい」

気が付いた時にはもう遅い。三代目火影は一人の女に翻弄され、あ
れよあれよと言う間に言われるがままになった。

小さな男の子を膝に乗せて、その頬に頬ずりする。嬉しそうなイル
マを羞恥心を捨て切れぬ三代目は頬を赤らめて見上げた。その初々
しい様がまた可愛いのだ。

やり切るダンゾウと戸惑う三代目。その差は裏と表で木ノ葉を支えた差であろう。

「君も大きくなりましたね」

「今現在縮んでおりますし、初代様二代目様に比べれば小男も良いところですよ」

三代目火影猿飛ヒルゼンが163センチなのに対して、初代火影千手柱間は185センチ、二代目火影千手扉間は183センチと高身長である。ちなみに、四代目火影の波風ミナトは179センチと決して小さくはない。しかし、忍としての力量と背はあまり関係しないのだ。

「千手の化け物兄弟を比較対象にしてはなりませんよ……あの戦時でニヨキニヨキ伸びるなんてキノコですよ！全く！」

かく言うイルマも本来は女性にしては長身で、成長を遂げた暁にはスタイルの良い姿になる。胸も尻も適度な大ききで柔らかいので、とても触り心地が良かった事を三代目は覚えている。幼少期に風呂に入れてもらった事は、多感な少年には忘れようにも忘れられない体験であった。

「君は大きな器の男になりましたよ。二代目亡き後、火影としての重責を一身に受けても君は折れる事なくこの里を大樹にしてくれた……こんな小さな時から知っている身としては嬉しくて仕方ないです」

「……流石にワシは人差し指と親指で表せられる程小さくありませんが」

比喩だと分かっている、気にする。三代目の言葉に、イルマは努めて優しくいう。

「実に言いにくい話ですが、昔、御母堂様と戦場で相見えた事が御座いました……危ういところでした。御母堂様が無意識に胎を庇っていらっしやらなければ、妊婦と分ならずバツサリ殺ってしまったかもしれません」

雨が降ると洗濯物が乾きませんよね、とでも言う様な気安い口調でさらりとトンデモない話をイルマはぶち込んできた。妊婦だから見

逃したという口振りだが、イルマがその事に気付いてなかったら此処に猿飛ヒルゼンはいなかったのである。

余談ではあるが、猿飛家には妊娠した女房をそれはそれは丁重に扱うべし、という家訓がある。恐妻家が多いといえれば実際そうなのだが、敵の小娘が^{イルマ}戦場で猿飛サスケに説教かました事から由来する、らしい。

「あの時の猿飛殿はおかしかったですよ。敵前だと言うのに、御母堂様に『でかした！』だの手を取り合って……こちらが困惑する程に惚気ていらした」

柔らかい頬に口付けて、髪を撫でる。自分の子どもか年の離れた弟妹を可愛がるように、イルマは三代目を愛でる。これが純粹な子どもであるならばまだ問題はないのだろう。

そう、中身が大人でなければ。

「二代目様を知ったら、ワシもダンゾウも半殺しですな」

三代目の罪悪感と僅かな背徳感は、昔語りに混じって続くのだった。

傍観者、曰く

潮騒が耳に障る。

時折響く軋む音が辺りに虚しく木霊し、ひそめる息すら煩わしい。白々と煙る靄もやが視界を遮るので、カカシは瞼を閉じた。

視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚の五感のなかでも人間というのは、感覚の殆どを視力に頼っている。故に、その情報を遮断する事で他の感覚を研ぎ澄ます事が叶うのだ。カカシは普通の忍者よりも五感が鋭い。それでも、海上ではいささか勝手が違った。

先程襲撃してきたのは霧隠れの中忍・鬼兄弟である。

霧隠れは周囲に海を配し、水の多い地形の為に戦闘もよく言えば水に特化した戦い方をする。木ノ葉の暗部でも指折りの実力を持つていたカカシが他国の中忍程度に負ける筈がないのだが、それがただの尖兵ならば話は別だ。

波の国も海に囲まれた場所にある。

もし、ガトーが霧隠れの抜け忍、それもとっておきの隠し球を用意しているとするならば、地の利がないカカシは不利になる。面倒ではない、と言ったら嘘になるだろう。

「……先生、さつきからずっと目を閉じてるけど大丈夫なの？」

「ああ、心配するな」

不安げに呟くサクラにカカシは微笑んでみせた。サクラを励ますだけの笑みだった。流石に、勝率を計算出来るだけの余裕はない。

もし、次に来るのが忍だとすれば上忍以上となる。忍は裏の裏を読むのが当然だが、カカシには部下である頭にタマゴの殻を付けたような忍のひよこ三羽と護衛対象であるガタイの良いオツサンを守らなければいけない。どれも戦力に換算するには心もとなく、時に足手まといになる。それでも、カカシは彼らを切り捨てるつもりはなかった。

「お前らはオレが守るさ、だから安心しろ」

忍にとつて、掟を守る事は至上とされている。掟を守り、任務の為に命を落とす事も厭わない。掟を守らぬ者はクス扱いされる。だが

仲間を捨てるのはそれ以上のクズだ。カカシはそれを身を以て知っていた。かつて、守れなかった仲間の分まで仲間を助けるのだ。

ただ、カカシは不意に思ってしまった。

此処にイルマがいれば良かったのだ、と。共に戦えたら心強いのに、と。そんな益体もない考えばかりが浮かんでは消える。きつと理由をつければどうとでも言い繕う事が出来よう。三代目が側に置いているからだの、二代目手ずから誅殺しようとした女ならば五影級の忍でないとは敵わない筈だの、御託をならべようと思えば尽きない。

けれども、それはきつと詭弁だ。

うちはらしくない、うちは。ソレは常にカカシに彼を思わせた。かつての友とイルマは性別も立場も違うというのに、カカシが勝手に重ね合わせているに過ぎない。彼にもイルマにもいい迷惑だろう。

「そこかぁーっ！」

そんなカカシの感傷を吹き飛ばすのは、やはり意外性No.1の忍者だった。何もない茂みに手裏剣を投げ入れ、なぜか格好つけている。

「コ、コラ……頼むからお前がやたらめったら手裏剣使うな。マジでアブナイ！」

口々にナルトを責める声上がる。

カカシは適度に窘めるだけで辞めた。もし、イルマがナルトを責めるカカシを見たならば、後が怖い。自然、身体が震えた。それでもナルトは懲りる事なく、周囲を見回る。そして、カカシが敵意を感じた方向へクナイを投げた。其処には白いウサギが震えている。そこでカカシは疑惑を確信に変えることが出来た。野生のウサギは夏毛と冬毛で色が変わる。時期はすっかり冬から遠退いているのに、ナルトが抱えるウサギは白かった。

此処には、確かに誰かが居たのだ。身代わりのウサギを使う誰かが。

刹那。

カカシは何かを感じた。先程の視線などと言う生易しいものではない。それは、言うなれば敵意であり殺意だった。

「全員、伏せろ！」

太い木の幹に、男は立つ。

正確には木に突き刺さる玉鋼の柄に。平たく厚みある刃は常人では持ち上げる事すら出来ない代物である。しかも、根元近くにはちようど人間の頭一つ分の穴があり、首を刎ねるのにお誂え向きだ。

カカシはその刀の事を知っていた。

――断刀・首切り包丁。

霧隠忍刀七人衆が持つ七振りの中の一つ。

「ほう、避けたのか」

そして、断刀を操る忍の名は霧隠の鬼人、桃地再不斬。

かつて、霧隠の陰惨な‘卒業試験’でその年の生徒を皆殺しにした逸話を持ち、数年前に水影に対して反乱を蜂起させた男だ。特筆すべきは、卓越した暗殺技術である無音暗殺^{サイレント・キリング}を得意とすること。そんな男の得意とする水の多い場所で、これから戦わねばならない。

元暗部は伊達ではないのだ、ならばこちらも覚悟を決めねばならないだろう。

カカシは額当てをずらした。

*

右に左に上に下に、水の上まで戦場として戦う。そんな忍の、忍らしい戦い方を俯瞰する。戦場から少し離れた木の上は常と変わらぬ静寂を保っている筈だった。その中の一つにそれはいた。

「うわー押されているー！」

傍観者は太い枝に腰掛けたまま、傍観を続けている。迷彩柄のポンチヨを纏い、隠れていたのかそれとも隠れていたくないのか、ケラケラと笑っていた。何時も同じ面を被る姿は見る者が見れば異様に見えない。それでもその肩には鳥が止まっているし、そうと知らぬ人が側を通っても気付く事はないだろう。

存在感がないのに、やたら騒がしい暗部など存在価値の判断に迷うところだ。

「ふうん、随分面白い使い方をするもんだ」

相手の技を写輪眼で瞬時に読み取り、それをそのまま使う。同じ印

を結び、同じ動作を取り、相手を煽る様な言動と共に写輪眼がまるで予知能力を持っているかのように振る舞う。ハツタリをかますには最適だろう。

勿論、写輪眼を持っている人、又はその能力者を知っている者ならば予知能力などない事を知っていよう。写輪眼の基本能力は圧倒的なまでの観察力だ。木ノ葉の人間ではないと分かっているからこそそのブラフだ。

だからこそ、解せない。

「動きも発想も悪くないのに攻め切れないのは、守る戦いに慣れてないせいかな？」

依頼人と部下を守る事に終始しているのは良いが何処か動きが硬い。捨て身にも慣れず、再不斬を倒した後の事が頭にあるのか身体が思う様に動けていないのだ。どうやら、仲間を守れぬ事など極度に恐れているのかもしれない。その気持ちは分からなくないが、それでは本末転倒というところだ。これは改善の必要があるだろう。

そもそも、アレ^{桃地再不斬}程度に写輪眼を使う事もない筈だ。所詮、霧隠など影以外平常心を持ってば対処出来ない事はないのだから。そうしている間にも、勝敗は大方決まりつつある。傍観者は傍観者らしく、押し黙ったまま全てを見守っていた。

「どうしようかなあ」

再不斬の作り上げた水の檻の中、カカシは苦しそうだ。それはもう、死にそうなくらいである。

もし、カカシが再不斬に負けたらどうなるのか。

正直あり得ない話だ。だが、もしそうならば傍観者は本当に乱入しなければならぬ。ナルトは九尾を持っていて。狐面の個人的な感情もあるが、その檻たるナルトが損なわれてしまえば里にとつても火の国にとつても非常によろしくはないのだ。しかし、それで計画が頓挫してしまうの痛い。木ノ葉が捕らえたいのは、使われる刃物^忍ではない、使っているその人^{ガトウ}なのだから。

傍観者がその仮面を捨てようとした瞬間、サスケが動いた。再不斬目掛けて風魔手裏剣を投げる。下忍らしくない洗練された動きだが、

相手は元暗部。

避けられるは必然だ。

「ふふっ……」

それでも、狐面は溢れる笑みを噛み殺せなかった。俯瞰で見えていなければ気づかなかったかもしれない。

この場にナルトがいないという事を。

場違いな程の軽い破裂音と、煙に狐面は知らず両腕を抱え込んでいた。サスケの投げた風魔手裏剣に擬態していたナルトが再不斬へ攻撃を仕掛けたのだ。格上の相手に臆する事なく対峙する度胸と土壇場での発想は感服する以外ない。

鳥が飛び立つ。

隠せぬ興奮は両腕を仕舞い込むだけでは終わらず、法悦にも似た吐息をする事で鎮める。狐面は、なんとか傍観者に戻った。

これこそが次代の風なのだと、心を震わせながら大局を見定める。

「うん、吹っ切れてるみたい」

頭が冷えたのか、それとも部下の戦う様に感化されたのか。水の牢獄から解放されたカカシは写輪眼を使いながら再不斬を圧倒している。安心して傍観者でいられる展開だ。

あと少し、再不斬を追い詰められるという時、唐突に再不斬の首に千本が刺さった。

仮面を着けた小柄な忍が降りて行く。さも桃地再不斬を付け狙っておりまして、と言わんばかりの態度で再不斬の身体を担ぎ上げる。わざわざ回収するのに単独で、巻物も利用しないなんてお粗末もここまでくれば笑いがこみ上げそうになってしまう。何故、カカシは気付かないのか。それだけ写輪眼による消耗が激しいせいだろう。そうでなければ、あれだけ緊急時以外使うなどカカシに言い含めた甲斐がない。

「まったく、暗部にいたならば普通に追い忍くらいやってそんな事なのに」

追い忍をした事があるならば、回収する時は複数名で任務に当たる事は常識である。最低でもツーマンセル、拘束役と囃兼攻撃役に分か

れてコトに対処する。一人で追うなど、よっぽど相手が手強いが隠蔽したいかのどちらかだ。

回収する時に必要なのは胴体と頭、最低限それさえあればいい。回収対象は情報を盗み出したか、回収対象自体に価値があるかだ。例えば後者であれば、血継限界の類である。それを踏まえて、再不斬を見てみれば自ずと答えはみえてくる。

桃地再不斬は霧隠の暗部出身者で、特殊な大刀を操る。出奔してから随分経っているから情報も正確とは言えないが、水影の側にいたなら重要かつ本人が耐え難くなるような情報を手にしていたのかもしれない。また、今までの動きを見る限り、血継限界の類を所持しているようなそぶりはない。出すまでもないと判断されているなら別だが、死にかけても使わないのは相当な酔狂しかないだろう。

再不斬の持つている情報を手にしたいのなら、それこそ生きている状態で捕縛すればいい。情報を渡したくないなら、首でも掻き切つて殺せばいい。ちなみに、抹殺する時は火遁か風遁持ちが焼くか刻むかして完全に絶命するのを確かめておくのが最適である。つまり、あの仮面の追い忍もどきは殺傷能力の低い千本で動きを止めてまで五体満足な再不斬を救い出したかった、ということだ。きちんと断刀まで回収して行つたのだから。それほど再不斬の持つていた情報は重要なのだろう。

そう、本当に霧隠の追い忍だったと仮定したらば、だ。

傍観者は追い忍もどきが誰なのか既に知っていた。

本体が直接会つたのだからその素性も、再不斬を救う為に危ない橋を渡つた理由も余すことなく把握している。だからこそ、傍観者は漸分身体く動く事を決めた。多少の介入位ならば許されるだろうから。

*

「ありやーボッコボコじゃないですか。大丈夫ですか？」

木の上から降りて来たのは狐面をつけた女。怪しきで言えば先程の抜け忍処理人の比ではない。女が動けぬカカシの側に寄ろうとしたのを、サスケは盾になつて防ぐ。

「サスケ、待て！その人はお前が敵う相手ではないぞ」

「カカシは黙ってる」

嗚呼、なんと麗しい師弟関係なのだろうか。狐面は腕を組み、サスケを眺めた。しかし、その余裕のある様がサスケの癩に障るのだ。

狐面がその実、サスケの成長と意地を張っても尚仲間を思いやる様がいじらしくて可愛らしくて思い切り愛でてやりたいと思っているのも知らず、サスケはクナイを両手に構えて突進した。その速さは夕ズナの目では追えないほどだったが、狐面には通用しない。

彼女は腰に差していた小太刀を鞘ごと抜き、サスケの腹を突いた。膨らんだ頬から出てきたのは食らわせようとした火遁ではなく、涎や唾の類だ。それでも、サスケは諦める事をしなかった。今のサスケには子供と大人の体格差を跳ね返すだけの筋力はない。倒れたら、その瞬間組み伏せられるのが分かっているからだ。

現状、頼りになるカカシは写輪眼の反動で青息吐息。

ナルトは依頼人を守る為に動けず、サクラは周囲を警戒しながら加勢に入る隙を見ている。サスケ一人で狐面を抑えねばならないのだ。ただ、狐面はカカシがサスケでは敵わないと判断した人物である。敵の増援が何時来るとも分からない状況で長引かせるのはサスケにとって不利。ならば、刺し違えても此処で止めねば。

「火遁・豪火球の術！」

それは狐面目掛けて放たれた。避けるとしたら右か左か、サスケは警戒するもソレは予想外の場所から来た。

「チツ、下かー！」

狐面は地中からその身を覗かせて、サスケを狙いー見ってしまった。サスケの瞳に一瞬浮かんだ、勾玉の様な模様を。その緋色に染まった虹彩を知ってしまったのだ。

その一瞬の隙を見逃す様な甘さはサスケにない。狐面の首を狩る為にクナイを刺した。飛び散るのは血潮でもなく変わり身の木片でもなく、煙と軽い破裂音だ。

それまで警戒していたナルトはクナイを構えたまま、呆然と辺りを眺めた。食い入るようになれば、煙が晴れる頃、狐面の女は倒れ伏す事もなくカカシの首にクナイを突き付けていた。しっかりとその背

に体重を掛け、関節を決めているのも流石である。

「うふふ、念には念を入れて影分身を数体用意しておいてよかったです。さて、サスケくん、先生を殺されたくなければクナイを離して下さい」

サスケは悔しそうな表情でクナイを手放した。それを見届けてから狐面は嬉しそうに笑いを零すとカカシの頬をひと撫でしてから離れる。サクラが影からカカシの方にいた狐面を攻撃したのだ。

戦略としては上々である。

疲弊しているとは言え、カカシはこの場の誰より強い。解き放たれば一定以上の働きは出来るだろう。それは再不斬の時に分かっている。でも、まだ読みが甘い。狐面が依頼人を殺す事を考えていないのだ。サクラをカカシに投げてから、ナルトの側へ飛ぶ。

狐面は何も言わない。クナイを構えてタズナへと近付いていく。氷を滑る様な滑らかさでタズナの首を――。

「暗部のネエちゃん、遊び過ぎー！」

口を尖らせたナルトの指摘に、タズナの首の皮があと数ミリで切れるというところで狐面はピタツと止まってみせた。顔から球のような汗をかき、目を白黒させるタズナを見ずに、狐面はナルトの方を向く。

「嗚呼、やっぱりナルトくんは騙せませんでしたか。実は近くを通りすぎだったので、最初から見えていたんです」

おっとりとした口調でナルトを褒める狐面は先程までの気迫が嘘のようになかった。風が凧ぎ、常の静寂に戻る狐面にナルトはにっこり笑ってみせた。この人は大丈夫だ、という野生の勘みたいな直感がナルトにはある。まるでずっと側に居てくれたかのような安心感すらおぼえていたのだ。

ナルトを愛でる狐面に冷たい視線が突き刺さる。安定と安心の力カシからの視線だ。

「最初から見てたなら助けにくれようとか、思わなかったの？酷くない？」

勢い良く吹き飛ばされて気絶したサクラを抱きかかえたまま、力カ

シがボヤいた。そんなカカシの言葉に、狐面からじんわりと忍び寄る様な殺気が漏れ出る。カカシは苦笑いを浮かべて視線をそらすも、後々来るであろう説教に耳を塞ぎたくなつた。既に耳が痛いのは前に正座で聞いた事があるからだろう。

「……もう一人が潜んでましたし。ダメって言ったのに写輪眼使っちゃつた悪い子にはお仕置きですよ」

軽口ではあるが、ヒシヒシと怒りを感じさせる雰囲気があった。そんな狐面はカカシに肩を貸すとサスケを抑えていた方の分身を使つて、サクラを背負つた。出発する準備は完了である。

「あんた、何者だ？」

タズナの目が不信を語る。突然現れて木ノ葉の忍達を軽くあしらひ、タズナを殺そうとしたのだ、怪しむのも当然だろう。

「タズナさん、でしたか？ 私は通りすがりの暗部です。カカシさんとナルトくんとは顔見知りなのでご安心下さい」

「ーあ、さつきまでのはお遊びです。」

爽やかな口調で言い切られれば抗議の声も出ない。よく見れば狐面がタズナに突き付けたクナイは木製で刃の潰れた、練習用のソレである。打撲はするだろうが、皮など到底切れない代物だった。

「取り敢えず、貴方も家まで案内して下さい。送りますので」

狐面は冷たい声で告げる。僅かに見えるその瞳にはハッキリとした敵意と侮蔑にも似た感情が込められていた。

「勘違いなさらないで貰いたい、私はあくまで通りすがりの暗部です。カカシさんを安全な場所へ送り届けたら任務に戻ります故」

「ー早くしないと、再不斬が蘇りますよ？」

狐面の言葉にタズナとサスケは渋面を浮かべ、ナルトが不思議そうに狐面を見たのはどちらもタチの悪い冗談だと思つたせいだろう。他方、カカシは冷や汗を浮かべて明後日の方向を眺めている。

空には霧が掛かり、見る物を惑わそうと待ち構えているようだった。

三ババア

当番を変わってくれ、と言われた時、イルマは瞬間的にその相手をド突きたくなつた。それは休日の暇を持て余して、暗部の書類を整理しているときで最中であつたから尚更。

長期に渡る潜入捜査をすっぱかして何を抜かすのかと思えば、恋人とデートしたいのだという。其処で漸く、そのバカツプルが彼氏彼女を欲していた二人だと気が付いたのだつた。需要と供給の合致か、もう手っ取り早く済ませたのかは分からないが、カップル成立して幸せそうに微笑む男女。

彼、彼女を爆発させる程厳しくはないが、砂糖を吐くまま流される程イルマは優しくない。イルマとてかつては初代・二代目に重用された施政者である。腹切つて死ねとは言わないが、長期任務をすっぱかすなら幻術で説教も辞さない構えだ。甘えさせるのと、甘やかすのは違ふのだから。

それでも、当番を変つたのはバカツプルの男が呟いた「波の国の任務」という言葉と女の言う「チョコ野郎がウザい」という言葉が気になつたからだ。

チョコ野郎と聞いてイルマが思い出したのはガトーカンパニーの事だ。

世界有数の大富豪であるガトーを中核にして表向きは海運業者として名を馳せているが、中々悪どい商売をしている奴らだ。時折、任務妨害をされているので前々からその内抹殺してやろうとイルマは心に決めていたのだ。

其処で嫌な事を思い出した。

思い付いた、と言つても良いのだが。

波の国は木ノ葉属する火の国から海を隔てた向こうの小国である。周囲を海に囲まれ、漁業と海運位しか商業のなく隠れ里も持たないような国だ。そんな国から来た人間が、わざわざ木ノ葉隠れの忍に護衛を頼むだろうか？それもうら若く可憐な娘ではなく、橋造りの得意な屈強な大工だ。

海運を生業にする悪徳商社

海に囲まれた小国

橋造りの名人

イルマは溜め息をついた。

何がCランクだ、事と次第によつてはSランクにも等しい工作をしなければならぬ。まあ、これで完璧に潰せるならばお釣りが来てもいいだろう。

「分かりました……変わってやりましょう」

ただし、多少の条件はつけた。

それでも、変わつてやった忍達は喜んでいた。その意味をイルマはもつと考えておけばよかつたのだ。そうしたら、こんな思いをせず済んだかもしれない。

*

しゆるしゆると。

赤い糸の様に繋がつて、落ちていく。その端を皿に乗せて纏める。「全く、定着するまで時間が掛かるから無理はしないように、と口酸っぱく言つたつもりなんですけどね」

わんこそばの要領で剥いた林檎をカカシの口に突っ込んでいく。マスクをめぐつて押し込んでを繰り返すせいでカカシは何も言えなかつた。そもそも、反論したら恐ろしい目にあいそうなのでしないが。

「も、もう少しペースを落とすしてくれませんか？あと、林檎位起き上がつて食べます」

無論、抗議は物理攻撃（林檎）で沈められる。怒りを感じたカカシはおとなしくするしかなかつた。

「定着すれば写輪眼使いホーダイ！万華鏡だつてし放題！ではありませんが、それまでは経絡の流れに負担を掛ける代物です。それ程の禁術なんですよ？」

新しい林檎をクルクル剥きながらうさぎさんにしていく。赤い目を残し、爪楊枝に刺した林檎が飛び跳ねる様は芸術的でもある。ただ、リアル過ぎて食べにくい。

「あれ位ならば写輪眼ナシでも倒せたでしょうに」

「つ、はあ……再不斬はビンゴブックでも上位に位置するんですがね」
そのビンゴブックでいえばssランクは軽くいく人物を思い出してカカシは口を閉ざした。それも目の前で林檎をウサギさんに剥いているのだから、何も言えない。しかも、50年近く木ノ葉と岩隠で搜索されて、未だ死亡認定されていなかったりもする。色々な意味で規格外だった。

「まあ、ザブザブくんの生い立ちは興味ないですが、水の国が今も戦国状態つてのは分かります。だって、私と同じようなもんでしたし」

そう口火を切ったのは狐面の女だ。皿の上には八切れの林檎が全て違ったポーズのウサギになっていた。女は林檎の切れ端を食べ始めた様で、赤い紐状の皮が仮面の下へ消えていく。それがちよつと怖い。

「擬似的に戦乱状態を作り、それに勝ち残る者のみを戦力とするのはよくある手ではありますが、霧隠程度では組織としては貧弱になりま
すよね」

もぐもぐと食べながら狐面は呟く。

火の国、ひいては木ノ葉が巨大な力を持ったのは何も有力一族が集ったからだけではない。豊かな自然や穏やかな気候に生まれ、人口を増やす事が出来たからだ。

人間が増えればそれだけ労働が生まれる。非戦闘員が多くともそれと同じだけの戦闘員を作る事が叶うのだ。それ故、暗部や「根」では比較的戦乱に似た環境で人材を育成出来る。分母が大きければそれだけ優秀な人間も育つということだ。

水の国は秘密主義で立地も規模もあまり良いとはいえない。海と水、小さな島々に囲まれた人数の少ない国でそのような戦乱状態では里などあつてないもの。そんな無秩序状態の里では育つものも育たない。仮初の恐慌状態を本当にして国や里を乱れさせるとは、なんとも馬鹿馬鹿しい話だ。まるで始めから治める気などないみたいだ。

「抜け忍になろうと思った切っ掛けが例の逸話皆殺しなのか、それとも上層と折り合いが悪くなつたのか分かりませんが彼は常に雇われ先に恵

まれないようですね」

火の国と波の国は目と鼻の先にある。そして、小国であり、隠れ里を有さない波の国は火の国の庇護下にある。つまり、有事の際は波の国は火の国に頼って来るのは織り込み済みなのだ。例え、完全な属国になろうとガトー程度の支配下に置かれるよりもマシというものだ。波の国の異変を知った火の国及び木ノ葉が干渉してくるのは必須。

遅かれ早かれ、木ノ葉の忍が波の国に来る事は承知の上で雇われたに違いない。困窮した抜け忍故か、それだけの腕があると自負しているのかは知らないがガトーの下は居心地が悪いだろう。

狐面はサラリと唇を動かした。

「しかし、霧隠もおちづれたものです。あの水影殿はあんなに強かったのに……殺せなかった人は久振りでしたもの」

カカシは考える事を辞めた。人間、深入りしすぎると行けない事があるのだ。実行した時代が初代か二代目か三代目か、など気にしてはならない。気にしたら負けなのだから。

外は風が出て来たのか、窓辺の木々を揺らす。

上手くいけば霧もなくなり、晴れるだろう。絶好の修行日和に違いない……ただし、カカシはまだ寝込んでいるが。

「ナルトくん達は私達にお任せ下さいな。基礎の基礎は叩き込んでやりますよ」

基礎の基礎とは、チャクラコントロールのことである。身体は成長と共にどうしても動かせるが、チャクラコントロールに関しては修練と慣れでその後の人生を大きく左右してくる、と言うのが狐面の自論なのだ。

「コレでも講師としては優秀なつもりですから」

——三代目子猿とかダンゾウくん子猿に風遁を仕込んだのは私ですし！

ささやかな胸を張って微笑む狐面にカカシは頭を抱えた。

片や全ての技を修め木ノ葉の長として永きに渡り里を統治して来た男であり、片や忍の闇と呼ばれ里を支える為に暗躍して来た男だ。その土台をイルマが作ったとなればそれは素晴らしい事なのだろう。なのに、一抹の不安が残るのは何故か。対外的にはイルマは謀反人で

あるからだろうか、いや、それとも何処となく抜けた性格のせいか。目の前の分身体はカカシの疑念すら気に掛けず、林檎のお代わりを剥き始めた。裏表があるろうとなかろうと、このマイペースさが不安に繋がっているのは想像に難くない。

「お手柔らかに頼みます」

カカシはそう言うしかできなかった。

*

鬱蒼と繁る林立の間から、同じくらいの高さの木を探し出した狐面はナルト達の前に立つ。

「さて、今回は皆さんに基本からおさらいしましょう。簡単だの出来て当然！なのは知ってますが、土台硬めは大切ですからね」

寝込んでしまったカカシの代わりに教鞭を取ったにしては手馴れている。何時もならば一番騒がしいナルトが大人しく膝を抱えているのもそれをらしくさせている一因だ。

「まずはチャクラについて。誰か分かる人！」

真ん中からまつすぐ腕が伸びた。サクラが

「チャクラは大まかに言えば、経絡からなる体内エネルギーと精神エネルギーを練り上げること。その練り上げたエネルギーを印を結ぶ事で術に変える事が出来ます」

これ以上ない程正確なサクラの解答に狐面は頷きながら拍手をした。

「そう、大正解！この他にチャクラには形態変化や性質変化などがあります。まあ、こんな感じですが」

狐面は短刀を取り出すと、その刃にチャクラを流し込む。鈍色をした鋼の上に紫掛かった電流が迸った。子供達は初めて見る技に興奮を隠せずにいる。それを宥めながら告げる。

「どんなに質や量のいいチャクラを持っていてもコントロールが出来ないと、忍術を使いこなせないのですよ」

狐面は三人にクナイを渡すと、手を使わずに木を登る様に指示した。チャクラだけで物体に張り付いて移動する、忍なら息をする様に出来ねばならないことである。正直、アカデミーで一番教えるべき項

目であると狐面は確信していた。実戦で生き残るうちにある程度は勝手に身体が出来て行くものだし、精神の方もそれなりに整ってくる。あとは、如何にエネルギーを運用するかだ。

喉が渴いたからつてお風呂の水を用意する事はないし、山火事を消すのにコップ一杯の水では到底足りない。適切な時に適切な量のチャクラを一瞬で練り上げる為に修業をする必要がある。動きを叩き込む様に、身体に覚えさせる方が良いのだ。

要は習うより慣れよ、である。

より効率の良いコントロール方法について狐面が思い馳せている時だった。

「おや？」

狐面は一步下がる。すると、その足元にクナイが刺さった。

「こんなもんか」

木のとっぺんに腰掛けて狐面を睨め付けるのは、うちはサスケだった。狐面的には当然と言ったところか、何と言っても事前の仕込みが違ふ。

ちなみに、膨大なチャクラの所為で上手くいかないナルトなど悔しそうに見ているが、うずまきと九尾が手を取り、タッグを組んで踊りながら一箇所に留まっている事を思えば上々であろう。サクラもほぼ上に着きそうである。優秀な子供達ばかりで、もともとそう低い鼻が高くなるのも当然だ。

狐面は腕を組みながら、次にさせる事を思案した。それが気に障ったのか、サスケが話しかけてきた。

「おい、アンタとカカシのヤロウとどっちが強いんだ？」

「うーん、タイプが違いますから判断に迷いますね。それに彼、『白い牙』の息子さんで、暗部出身者だそうですね」

物理的に見下ろすサスケに狐面は悩んでみせる。しかし、それは事実でもあった。初代火影は置いておいて、全盛期ならばマダラや二代目火影にも引けを取らない練度はあっただろう。だが、今は未熟で脆弱な肉体を持つ身。技術や知識で相手の能力を凌駕するのにも限界がある。元の勘を取り戻すまで、分が悪いのだ。

それに、同じ里の相手に奥の手なんて使ってたまるか。

「随分弱気だな。アンタも暗部だろう？」

「まあ、そうですね。でも私なんて見習いみたいなものですし、四代目の時から生え抜きのカカシさんに勝つなんて骨が折れますよ」

しつこく聞いてくるサスケを適当にあしらいながら、狐面は木に挑む二人を見た。サクラはそろそろ頂上に着きそうだ。一方、ナルトは半ばから上にながれずにいる。少しコツを教えねばならないな。そんな事を考えながら狐面は片手でクナイを取り出すと、切りかかってくるサスケをいなした。

「そう殺気立つなよ、おチビさん」

「クツ、こんな簡単な事で時間を使う訳にはいかないんだよ！」

狐面は体勢を戻そうとするサスケを足払いで崩して、首にクナイを突きつける。よくよく見ればそれが前日タズナに使った練習用のクナイだと分かっただろうが、興奮するサスケは気がつかない。それだけ冷静さを失っているのだ。

サスケは焦っていた。

カカシと再不斬の死闘を目の当たりにし、上忍という存在の恐ろしさを再認識した。再認識して、より色濃く復讐を決意する。サスケが追う相手は普通の上忍よりも強い。里の警邏を担当していたうちは一族の、その悉くを倒したのをサスケは見たのだ。そんな相手を倒さねば為らぬのに、己はたかが抜け忍の殺意に当てられた。歯痒さが募るのも当たり前だ。

そんな焦燥を知りながらも、狐面は煽る。

「簡単、ねえ。じゃあ、なんで貴方は今這いつくばっているのかしら？」

本来のサスケならば、ここまでアツサリと狐面に捕まらないだろう。焦りと未熟さ、それにチャクラコントロールの疲れが感覚を鈍らせているのだ。

「ナルト君がこんなにチャクラコントロールに苦戦しているか分かる？ナルト君はチャクラ量が常人の何倍もあるから。でも、それだけなら何処にもでいるけれども、ナルト君は違う」

うずまきの家系だからでも、狐憑きだからでもない。ナルトは、『認めてもらいたい』という思いがある。

「あの子は強くなるよ。なんとと言っても、守りたい人がいるから……復讐は復讐を生み、そして絶望を齎す」

かつて、狐面の大切な従兄弟は復讐心に憑かれて死んだ。誰とも寄り添う事なく支えられる事もなく、守ってきた一族に切り捨てられた哀れな男である。不器用で誰よりも情に篤い男で狐面には兄弟のよくな存在だった。

もう、あんな悲劇を起こしてもらいたくないのだ。

「そんな君に！ 次のステップ！」

キラツと謎のポーズを取りながら狐面の指差す方向にあるのは、子供用のビニール製プールだった。青とオレンジ色のしましま模様の中にはギリギリまで海水で満たされており、これまたオレンジのあひるさんが水底で微笑んでいる。サスケにはその微笑みが歪んで見えた。

「この水面に立って貰います。零したらその分の海水を汲んできて補充した後、腹筋背筋等々、筋トレ100回……うん、簡単ですね」

ふんわりと狐面は水面に降り立った。それから一滴も水を零す事なく元の場所に戻る。飛雷神チートの術を使わなければ普通の忍はどうしても水を零してしまうというのはサスケに告げないし、飛び上がった時に水を足した事など言うはずもない。これは肉体疲労時のチャクラコントロールを体験させるための訓練なのだから当然だ。

「チャクラコントロールは簡単、なんででしょう？」

仮面の裏、ニヤリと笑ったのがサスケにも分かった。二体目の分身体はそうして、稽古をつけるのであった。

*

激んだ空気の中、一人身を縮めた。

右を向いても左を向いても野郎ゴロツキばかりで、その臭気に鼻がもげそうになる。イルマは目立たぬようにクリップボードに顔を向けた。その姿は怯える、ただの小娘にしか見えない。纏うスーツもタイトスカートも吊るし売りの安いものだし、黒のパンプスも歩きやすい既製

品だ。

何処を見ても、頼りない新入社員その一と言った感じである。

「……ガトー様、本当に私も着いて来て大丈夫なのですか？」

「ああ、安心しろ」

現在進行形で安心出来ねえから聞いているだろうが、このタコスケが！と思っても顔に出したりはしない。そもそも目元も黒髪で隠しており、表情も見えないのだから。

今回、イルマが変わった潜入捜査員の設定は20才、女性。生まれは波の国の対岸にあった木の葉の漁村であり、九尾の一件で消し飛んだ事になっている。村がなくなった事による心的外傷トラウマにより極度の人見知りになり、普段は黒髪を顔が見えない位に下ろしているという設定だ。

軽く括つてあるとは言え、白いワンピースでも纏つて井戸から這い出て来るお化けもかくや、という髪の長さだ。井戸の底から這い出るだけの能力（物理）があれば、敵など簡単にひねり潰せそうではあるけど。

イルマの目的は、ガトーが裏取引をして波の国に直接圧力を掛けている事実と帳簿の差異を白日の下に晒す事だ。抜け忍を雇い入れる先はなるべく潰しておかねばなるまい。それも里と国という制度を脅かすような、商人崩れに鉄槌を下すのも忘れずにおきたい。

目の前にいるガトーバカを暗殺したとして、その後釜に居座る輩がどうしようもなかったら第二第三のがガトーバカに出てくる。完膚無きまでにガトーカンパニーを潰しておくか、息のかかった人間を据えておくか二つに一つ。

まったく商人は商人らしく、弁えておけば良いのに不相応な野望を抱くから死ぬ羽目になるのだ。

雑魚を護衛につけていい気になるガトーバカを睨め付けながら、その後ろにつく。辿り着いた先には横たわる忍ハチ地再不斬だ。

嫌味でも言いに来たのか、役に立たない護衛をチラつかせて再不斬の側に寄って行く。このまま切り捨てられたら後々楽なのに、再不斬も白も流石に依頼者を殺そうとはしないらしい。下衆相手でも一定

の礼儀を持って対処しているのは褒めるべきところだ。

「この女を見張りとしてつける。用があるならなんでもこの女に言い付ける！」

「ガトー様ツ！そんな……お待ち下さい」

このチヨコ野郎ぶつ殺す！

イルマが確かな殺意と、この任務を受けた事を後悔した瞬間だった。さっさと出て行くガトー《バカ》に追い縋る様な真似などプライドが許さないし、かと言って此方を凝視する忍二人を何時迄も無視する事が出来るほど凶太い訳でもない。行き場のない腕を下ろし、空虚な隠れ家を見回した時だった。

包帯塗れの怪我人と目があう。

「おい、女。貴様何者だ？血の臭いがするぞ」

ニヤニヤする怪我人はイルマの堪忍袋の緒を、サクツと切った。

これが平時であればイルマも流せただろうし、言い繕ってみせたらう。微笑んだり、動揺してみせたり、普通の女性らしい反応を返せた。だが、散々セクハラを受けたばかりの、今のイルマには全てが地雷で包帯塗れの怪我人は地雷原でタップダンスを踊り狂うアホに過ぎない。イルマは微笑む。それはカカシが逃げ出したくなるソレであつた。

マジでキレル五秒前、と言う奴だ。

「このツ！無礼者が！」

イルマの右手がしなり、怪我人の頬を捉えた。怪我人の名前は桃地再不斬。ほんの少し前に、はたけカカシに負けそうになったその人である。潜入捜査の設定かなぐり捨てて再不斬に突つかかる姿に、護衛である白は何故か止めようとしなかった。

「……ククツ、凶星か。血の臭いは裏切らないな」

「再不斬さん……其処までにしてあげて下さい」

白はイルマの肩を抱き、その背中を優しく撫でた。その労わりがイルマには嬉しい。ささくれ立った心に染み入るようだ。

「ア？何を言つてやがる。その女から血の臭いがするのは本当の事じゃねエか」

その言葉にイルマはブチギレた。

「もうヤダー！バカで臭いオツさん達は人の尻や胸を触ってくるし比較的マトモそうだと思った忍者は月の物に関してグチャグチャ言うてくるし！」

女は、強い。

確かに物理面では男よりも弱いのかも लेकिन、精神的にはかなりのものだ。そして、涙は時に武器となる。それも、弱そうに見えるなら余計。また、恥を捨てた女程恐ろしいものはない。

「仕事だ、仕事だって我慢して来ましたが、私があのカトーとか頭の弱い野郎共を殺せるなら既に惨殺してます！私の血の臭い？嗚呼、この純粋な殺意じゃないんですかね！」

涙目で睨むイルマの後ろには般若がいた。

今現在、イルマの分身は全部で三体いる。一体はカカシの側に、もう一体はナルトやサスケ達の側にいる。元々は五体いた内の残り二体は里に残して睡眠を取らせていた。だが、もうその分身はない。これがどういふことか、賢明な方ならきつと気付いているだろう。

分身を残す為には、本体は睡眠を取ってはならない。

事務作業、会計処理という睡眠導入剤を潜り抜けた三徹の鬼は今日、寮に戻って分身からの情報を噛み締めながらゆっくり惰眠にふけりたかった。それから明日改めて分身を送りたかった。それだといふのに、何処ぞの甘味野郎の所為で寮にも戻れず、忍の面倒を看なくてはならない。

イルマは苛立ちを隠せなかった。

睡眠不足が祟って、前後不覚に陥る前にこの苛立ちを何とか消化したかった。つまり、再不斬は八つ当たりされていただけなのだ。

「……悪イ」

その剣幕に遂に再不斬は謝った。ぎゅつと白に抱き付いたイルマは涙も拭わずに告げる。

「私も仕事ですから、要望通りの品は揃えます。ですから、貴方達もこの仕事終わったらアイツら殺しといて下さい」

それは、心の底からの言葉である。

この後、散々ガトーへの不満を零したイルマは、再不斬からなだめられるまでクダを巻くのであった。

幕間

野戦病院さながらにワンフロアぶち抜きで寝台が並んでいる。老若男女問わず横たわり、身体を繋ぐ機械音と微かに呼吸が漏れ聞こえる以外は物音一つしない。無機質な音にも身じろぎしない彼らより等身大の人形を丁寧に飾り付けておいた方がよっぽど患者らしかった。

午後の日差しがカーテン越しに照らしているというのに、辺りの時は凍りついて動こうとしないようである。重く、息苦しい。その不気味なまでの静寂の中、座した老人は顔を上げた。

「なんじゃ、来ていたのか」

ーダンゾウ

と、老人が呼んだのは同輩の名前だ。老人が三代目火影でなければ、ダンゾウが暗部の闇を担っている事を除けば昔と変わらぬ関係である。初代の薫陶を受け、二代目の教えを継いだ弟子同士で幼馴染なのだから当然だろう。

ダンゾウは鼻を鳴らして、周囲を見回した。

「いつ来ても此処は死の匂いがするな」

かつてこの場所は、うちのは財産から拵えさせた新病棟の全てを埋めていた。一人、また一人といなくなり、今では一つの階に集めるだけで済んでいる。重い空気が流れているのも当然だ。それだけの人間が死んだ。里を作った千手もうちはもかつての隆盛から程遠い場所にある。これを退廃と呼ぶのか、歴史の荒波に揉まれていると言えれば良いのか後世を生きなければ分からないだろう。

今を生きるダンゾウには屍の群れなど見飽きたものだ。ただ、見て気持ち良いものではない。それがイルマを捕らえているならば尚更。其処で生まれ、厭い厭われ、抜け出そうとしても逃れられなかった血という枷は、今もイルマを煩わせるのだ。

嫌気を擧め面で表現するダンゾウを横目に、三代目は前々から聞いてみたかった事を口にする。

「そういえば、先程聞いたのだが……おぬし、本当にイル姉に求婚した

のか？」

「イルマ様から聞いたのか？」

三代目が領けば、ダンゾウは唇を綻ばせた。押し隠していた感情を昔馴染みに知られるというのは気恥ずかしい事ではあるが、それに勝る想いが溢れていたのだ。

「嗚呼、昔からお慕い申し上げていた。かつては子ども特有の淡い感情でしかなかったが、今では心からお守りしたいと思っている」

堂々とした声だ。

齢重ねた老人の抱く重厚さと、壮年の威勢の良さ、少年のような純朴さ、青年の爽やかさが入り混じる態度だった。ともすると違和感を感じさせるものだが、虹がその七色を損なわぬようにダンゾウの姿も不思議と調和していた。

ダンゾウは目蓋を閉ざして、肺腑に溜まった感情を晒す。

「あの時。イルマ様がマダラが生きていると主張した時、ワシ以外誰も話を聞こうとせなんだ。狂いだからと、実弟のカガミですら相手にしようとしなかった」

イルマは主張していた。

マダラのチャクラを感じたのだ、と。確かにマダラの死体がかつて見たが今一度墓を暴き、その死体を目の前で燃やしたい。それが叶わぬのならば目だけでも奪って欲しい、と。普段の冷静さからは程遠い恐慌振りではあれ、筋は通っていた。ただ、マダラという存在は木ノ葉では禁句であり、うちはイルマという女がその事に言及するには早過ぎたのだ。

ある人は嘆いた。姉は未だ従兄弟達が生きている妄執に憑かれているのだと。

ある人は蔑んだ。憧憬が一瞬で軽蔑に変わり、彼女はその言葉を無視した。

ある人は畏れた。イルマが本気になれば己では止められないだろうと。

ある人は考えた。姉のような人を信じる為にマダラが生きられる可能性を模索し、幻術や変わり身などを想像すれども死の因果を否定

出来る魔法のような術は思いつかなかった。

ある人は聞いた。ただ寄り添い、周りをどう説得しようか悩んでいた。

二代目は何も言わなかった。そして、イルマの為に動かなかった。遂にはイルマを表舞台から遠ざけて、幽閉しようとしていた。

それがうちはイルマを離反させる原因だったに違いない。

「もし、誰かがイルマ様の言う通りに墓を暴き、マダラを灰に帰していたならば里抜けなどしなかっただろう。せめて確認だけでもすべきだった」

止めに行つた二代目火影がイルマの左腕だけを持ち帰った後、火影の弟子達は密かにマダラの墓を暴いた。けれども、そこには何もなかった。肉も骨もない。人が安置された形跡はあれども、随分と前のようにだったのである。つまり、イルマの言う事は虚言や妄想の類ではなかったということだ。

呆然と佇んだ一行の中で、真つ先に慟哭を上げたのは誰であったか。

「嫌な事件じゃったな」

三代目火影は遠い目をした。酷いなんて一言で言い表せないだろう。

冷静に戦力という点から鑑みれば、イルマは強かった。器用貧乏な向きはあったが、マダラの片腕であった事を思えば当然である。火影の補佐も手馴れていたし、里の子どもであれば誰にでも優しかった。里を第一とし、一族でなく里の枠組みで物事を考えられた稀有な人だ。人当たりも良く、癖のある忍の相手でも難無く熟した。

翻つて、己に素直になればこれまた荒れた。

家族や憧れの女性が強く言う事を戯言と切り捨て、離反へと追いやつたのだ。残つたのは、左腕（物理）のみ。罪悪感と己に対する嫌悪感でカガミを筆頭に病んだ。その憤りや遣る瀬無さをぶつける為にどれだけの敵が惨殺されただろうか。比較的冷静だった三代目は戦々恐々と仲間を見ていたものだ。ついでに左腕を切つただろう師匠も荒れていた。逃げられて自業自得だ、なんて口が裂けても言えな

かったものだ。

その後ろめたさがあるから、今現在イルマが里内で自由に振る舞えるのだから世の中分らない。うたたねコハルや水戸ホムラなどがイルマと顔をあわせることすらしないのは、図らずも裏切ってしまった償いのようなものだろう。

イルマは強い。けれど、同時に脆いのだ。イルマが守ろうとする一存在（木ノ葉）はあまりにも大きく、一人では決して守りきれない。誰かが支えなければならぬだろう。

「イルマ様には後ろ盾がない。初代様二代様、実弟のカガミも亡き今、誰がイルマ様をお守り出来る？ うちは一族など最早風前の灯火だ。だからこそ、ワシは言ってしまったのだ」

「そうか……しかし、既に断られたのだろうか？」

「いや、うちの一件があつてな。答えを貰つておらんままだ」

それはそうだろう。

イルマにも立場というものがある。表舞台からは消されても二代目の側近で、貴重な血筋の持ち主だ。おいそれと容易く番い、情を交わす事も絆される事もないだろう。如何にかつての教え子だとしても許される事ではないのだ。

断わらぬのはイルマらしい優しさなのかもしれない。或いは、酷さか。どちらにしても老い先短い老人が夢見るには随分と甘美な夢であろう。

そんな考えを巡らせていた時だった。

三代目火影・猿飛ヒルゼンは凍りついた。気付いてはいけない事を気付いてしまった瞬間である。その事実は今まさにくわえようとしたパイプを取り落としてしまう程、衝撃だったのだ。

三代目が気付いた事、それは求婚時期だ。

それまで加藤ダンゾウがイルマに求婚したのは最近の事だと思つていた。それが戯れか本気なのかはこの際問題ではない。問題は見た目年齢である。現在、うちはイルマの見た目十代後半くらい。己と同輩のダンゾウが六十代後半、七十に手が届くほど、ほぼ孫同然の年だ。限りなくアウトに近い何かである。ドン引きだが、互いに納得し

ているならば第三者が口を挟む事はなからう。他方、中身を鑑みればイルマは年上という事もあって、初恋を拗らせたと分かる。これまたドン引き案件ではあるが、世界は広い。妻子を捨てて憧れの女性と結婚した例もあるものだ。

それと同時に世間の目というものもある。

ダンゾウは「うちの一件」と言った。それが三代目の知る一件ならば、大量昏倒事件の事を指しているならば大体四、五年前。その頃のイルマさん十代前半でダンゾウが60代前半から半ば辺り。大量昏倒事件前に求婚しているという事は、つまりそういう事だ。

立派な犯罪現場の出来上がり、である。

「アウト」

三代目はイイ笑顔で親指を立て、思い切り下へ向けた。地の底抜けて根の国へと逝ってらいっしやいと云わんばかりである。決して土遁を使えと言っている訳ではない。暗部に帰れ、と言っている訳でもない。しかし、三代目が幾ら好意的に捉えようとダンゾウとイルマを見ようとも哀しいかな、後ろ盾のない少女を権力者が手込めにしているようにしか、見えない。

立派な案件である。

―お巡りさんへうちは一族、コイツです。しかし、三代目の期待も虚しくうちは一族の殆どがこの場で寝ている。取り締まる人間が圧倒的に少なかった。

もし、何も知らぬ人間が加藤ダンゾウがうちはイルマに求婚した事実を知れば驚愕に打ち震え、そして気づいてしまうだろう。少女を手にする為に少女の保護者諸共一族を消したのではないかと。それが本当か嘘かは問題ではない、幼気な娘に手を出す老人が悪名高い加藤ダンゾウである事で十分だ。

真実、ダンゾウが今まで初恋を拗らせて純愛を貫いていたとしても周囲はそうとは受け止めない。不憫だが自業自得ともいえよう。

どう諦めてもらおうか、三代目が思案し始めた時だった。

「ダンゾウ、諦めろ。お前が告白するには五十年遅い」

一言でダンゾウが固まった。

それは、戸板もない入り口から顔を覗かせた水戸門ホムラによる冷静な突っ込みである。ホムラが視線を遣った先には怒りに打ち震える、うたたねコハルの姿があった。鬼のよう、ではなくまさしく鬼。かつて、イルマを姉の様に慕ってきたからこそ同胞の愚行が許せぬのだろう。

コハルは往時の速さでダンゾウに詰め寄った。一方のダンゾウも負けじとコハルを睨み付ける。

「ジジイ二人が暗部もつけずに辛気臭い墓場にいると思えば！ 貴様なんぞが姉さまあねに指一本触れさせんぞ！」

「長年恋い慕ってきた方が生きておられたんだぞ！ 仕方ないではないか！」

年甲斐のない喧嘩を続ける二人を他所に、ホムラと三代目はなんともなしに語り始めた。里、いや忍界でも有数の実力と権力が集まっているというのに和やかなものだ。此処が病院で、目の前にうちは一族が眠っていないければ高齢者施設のレクレーションにも思える。

「しかし、イルマ様は厄介な男ばかりに好かれるな。写輪眼がある訳でもないのに何故だろうか」

「分からん。ワシはずっと可愛がられるばかりだったからな」

三代目にとつて、イルマは年の離れた姉でしかない。イルマにしても同じ認識だろう。それで良いし、それがいい。心地よい関係を壊すつもりはない。きっと好いた相手にしか見せぬ顔もあるのだろうし、何気ない動作や言葉で惹かれる場合もある。

「イル姉は年上好きだからのう」

年下は庇護対象でしかないのだ。イルマが真に甘えられるのは目上の人間だけである。だからこそ、現状が恐ろしい。甘えて、泣き付ける相手のない状態など張り詰められた糸に等しい。切れてしまつたら、もう二度と元には戻れないのだから。せめて、その辛苦を和らげたいと思うのだ。

「ん？ 年下好きシヨタだろう。そうだから、今もナルトやうちはサスケを追って行ったのだろうに」

ホムラは持参していた茶を啜った。静かな部屋ではよく響く。

「なんだ、と？」

思わず、我が耳を疑った三代目は杖を取り落とした。

火影命令！とばかりに見栄を切って強制的に休ませた姉貴分が、脱走した上にお子様たちの護衛に回ったのだという。理由が年下好きだから？いや、そんな筈があるまい。結婚相手だって年上だったのに。

混乱する三代目の隣、少年に変化したダンゾウがコハルにシバかれるまでそう時間が掛からなかったという。

波間に消える斑雪

ほぼ一週間、イルマは毎日買い出しに出た。

しかも、拠点とは遠く離れた火の国へだ。波の国はガトー《バカ》が物資の供給を止めている関係で、物不足の物価高が続いている様で治安も悪い。火の国で買ってきた物資を奪られない様に、殺さない様に気を使うのは其れなりに疲れるものだった。完全にガトー《バカ》の支配下に置かれるまでは続くだろうし、或いは火の国が完全に介入するまで終わらないだろう。

それでも、食事を作り、包帯や薬を調達し、毒を盛ったか疑われない様に毒味をしてから共に食べる穏やかな日々が続いている。一週間という時間はあまりにも短い。

「あーガトー《バカ》様への報告書がなければ、素敵な休暇で終われるのに」

暖かい日差し、白い砂浜、美しい海。そんな理想とは全くもってかけ離れた霧だらけの曇天、閉鎖された黒い砂岩、灰色の荒れ狂う海が窓の外に広がっている。それでも、あの馬鹿野郎ガトが目の前にいないだけで随分と気が楽なのだ。

「そうですね、でも、それがお仕事なんですよね？」

そう白に言われてしまったら、どうしようもない。仕事は仕事だ。嫌な事があっても、報酬を貰っている限りは我慢しなければ。

「それを言われてしまうとどうしようもないのですが。正直、馬鹿らしくて」

「……フン、随分と鬱憤が溜まっているようだな」

「そりゃ、沈む泥舟に長居したくありませんもの」

曲がりなりにも、社長秘書が吐く言葉ではない。物騒な物言いに再不斬も何も言えなかった。イルマは頬杖をついたまま、家計簿を睨んだ。

「短期的に支配下に置くこうとするから歪みが出るんです。こういう時は数十年掛かる事を想定して、じわじわ進めなくては」

もし、イルマが同じような事をする場合は最初は優しい顔で近づく

だろう。波の国の人間がガトーカンパニーを受け入れ、それなしでは生活が出来ないように依存させる。例えば、イルマが会社を経営する場合、住民の為にと言って自ら橋を作ってみせるだろう。

その代わりに、住民にとつて少し高めの金を利用料として取り、検問を設ける。大名相手には少額低金利で金を貸し、感覚が狂った頃合いに高額高金利で貸し与える。どちらも「波の国」の為とお題目を掲げているが、その実、会社の利になる事しかしていない。後者は言わずもがなだが、前者も、多少手間が掛かっても高額な商品を運ぶには都合がいいだろう。海路では海難事故で水没するかもしれない。高額であればあるほど、危険回避を心掛けるものだ。

イルマの言葉に我が意を得たり、と再不斬は笑った。

「まったく、怖い女だ。大人しい顔をして阿修羅みてえだな」

「信頼はお金では買えません。時間を掛けて作り上げなければなりませんから。ところで、再不斬さん」

「ー気に食わない主人を裏切る気はありませんか？」

さて、本題はこれからだ。

*

その女は、単なる捨て駒でしかなかった。

漁村の出身であり、今では廃れた家の出身であるのも好都合だ。怪我の痕が醜く、その所為で根暗なのは頂けないが最初からその為に雇い入れた娘であるし、最低限の仕事がこなせるならば問題ない。

一度はその身体を好きに使ってやろうとした事もあった。傷は醜いが若い娘には違いないと思ったが、触ろうとする少し前から慌てふためき騒ぎ立てるので萎えたものだ。

どうせ長く生かすつもりはないのだ。いわば、磐石な体制を得る為の生贄である。娘一人の命で購えるなら安いものだ。

「白さんー」

ガトーは

「ひゃあー」

ガトーに突き飛ばされた女は悲鳴を上げながら、駆けて来る再不斬

へと倒れ込む。誰もが女の死を悟った時だった。

「なにっ！」

鋼鉄と鋼鉄がぶつかる音に、その場にいた全てが凍り付く。再不斬のクナイを女がクリップボードで防いでいたのだ。ただの女だと思っていたのに防げるとは誰も思っただろう。

「ふふっ……」

女は軽い笑い声を立てると、再不斬を見た。再不斬が驚いたのは前髪の向こうで光る瞳だった。それは濃い紫に染まり、炯炯と妖しく燃えていた。

「まこと、見事」

紅の唇を歪め、女が嗤う。

たったそれだけだと言うのに、再不斬は全身の血の気が引いていくような気がした。

そこから先は一瞬の早業だった。再不斬の手を取った女は白の隣に飛び、再不斬を横たわらせた。かと思えば、次の瞬間には姿を消し、ガトーの側にいた護衛の首を刎ねる。その上でガトーへ襲いかかった。最後に残ったのは、ガトーの両足のみであった。女自体もいない。

「先輩、あとはこっちが片しますんで」

代わりに立っていたのは、スラリとした暗部の男だった。犬の面をした男は、カカシとも面識のある男である。

「テンゾウ、イ……いやさっきの暗部は何処に行ったんだ？」

「千ですか……恐らく古巣に。護衛任務から外されて嫌な思いしたらしく、憤ってましたから」

変わり身の術で呼び出された割に暗部の男は慣れていた。よくよく後始末に駆り出されたのか、手慣れているのが哀愁を誘う。

「古巣？」

誰かの疑問が上がった。

それに答えずともカカシは何処の事か、何と無く察する事ができた。カカシが怪しげな手術を受けたのは暗部「根」の処置室。里の上層部がイルマの存在を知っているならば、「根」の主も知っているだろう。

う。二代目火影を師と仰ぎ、尊敬する志村ダンゾウにとってイルマはどのような存在なのか、カカシは知らない。それでもきつと複雑な想いを抱いているに違いない。里を裏切ったとして師に裁かれた筈の先達が自分よりもずっと若い姿で現れた事など、普通なら考えられないからだ。

ダンゾウの好悪は置いておいても、実は憤慨していたイルマがガトーの脚以外を攫って行ったと言うことは間違はなく血生臭い話に違いない。

「うーん、気にしちゃダメってコトね」

「……そうですね、千はやりたい放題ですし」

暗部の男の脳裏には、ナルトを可愛がりたい欲求を同僚である自分や「根」の主で晴らしているが浮かんでは消える。病的なまでの子供好きが、ナルトや施設の子供に任務塗れで近寄れないのだからしょうがないのかもしれない。

問題は、彼女が年若い女の姿をしている事と憂き晴らしの相手が下心がない訳ではないと言う事だった。男もその双丘は柔らかで弾力性もあると言うも知っていた。彼女も人形遊びをする様な年頃ではないが、適度に相手をしてやれば付き合い難い性格ではない事も奇妙な関係に拍車をかけていた。

男性扱いされてないと言えばそれまでなのだが。

「なんか不穏な事考えてない?」

「まさか」

妄想とは、偉大な存在だ。山中一族さえいなければ頭の中を読まれる事もないし、何といても自由なのだから。

「さて、僕も仕事をしますか」

暗部の男は、地面に横たわる白と再不斬に取り出した巻物を押し当て、二人を巻物に収めた。

「な、何してんだよ!」

「千に回収頼まれたんでね。彼らは暗部が処理するよ」

処理。

おおよそ人間に対して言う言葉ではない。だが、忍とはそういう存

在なのだ。

小話

身動き一つ出来ないのは身体が萎えているからか、それとも幻術か何かでもかけられているからか。桃地再不斬には白い天井をただ眺める事しかできない。

「此処は、木ノ葉暗部。下手に逃げようとしないう方が身の為よ」

ごく丁寧な状況説明に首を動かせば、白づくめの女が手を振ってみせた。ところどころに赤い血飛沫が飛んでなければ清潔であつたらう手術着と、唇を隠すマスクが眩しい。その声も妖しく光る深紫の瞳も再不斬には覚えがあつた。

「私は、うちはイルマと言う」

イルマは、小娘が浮かべるには妖艶な表情で微笑んだ。そして、白い織手が再不斬の頭を撫でた。正確には、再不斬が頭に付けている額当てを、だが。

「キミは、里を抜けたのに額当てに傷付けてないのですね」

普通、抜け忍は己の里から出奔した後に額当てのマークに線を入れる。己が手で、里から離別するのだという証である。それをしないとこの事は里抜けしていないに等しい。

「霧隠が好きなんだね」

口調こそ優しいが、何処か断定しているような口調だ。

「人間が人間を殺すとは、なんとも不毛な事だとは思わない？でもね、大切なモノを傷つけられたとき」

「何が……いい、たい」

*

暗部、根の第三実験室に灯がつく。此処ではどんな事でもあり得たし、秩序などあつてないようなものだ。倫理も人としての尊厳とやらも投げ打った底辺中の底辺、奈落の底にも似た存在である。

「うわ、今日は一段と響くな。苦情でも言うか」

「本当うるさいよな、猿轡でも噛ませておけばいいのに……あ、静かになつた」

廊下で歓談する忍達はもう慣れっこといった風だ。彼らは労基も福祉もたいして機能していない世の中で、厚生福利をちゃんとさせようと日夜働く暗部「根」の皆様である。彼らは保育園や孤児院では立派な先生であるし、街中の清掃員（物理も含む）であり、老人介護のスペシャリストであり、そして何より暗部の人間である。自らの疲労を思えば部屋の中で何が起こってしようと、睡眠が妨げられなければ良いのだ。

「流石、イビキさん！あんな拷問なんて思いつきませんでした」

「いや、貴女の抉る様な殺意と精神への揺さぶりには勝てませんよ」

和やかな雰囲気で物騒な事を語り合う二人は互いに褒め称え合い、握手を交わす。返り血がなければ爽やかな青春の1頁にも映ったろうが内容が内容だ。

苦情を言おうとした忍二人は素知らぬふりをして廊下を歩いて去った。触らぬなんとやら、という奴だ。喜々とした様子の加虐性癖共に付き合っつて、元から擦り減った何かを更に擦り減らす事もないだろう。

「そういうえば、先程の映像は如何されるので？」

「前見た漫画みたいに残骸ごと送り付けます。まだ生きているとなれば驚くでしょうね。何にせよ、会社組織は徹底的に解体されるでしょうし、以前のような繁盛は到底無理でしょうから」

クスリと、狐面は笑んだ。

実はガトーカンパニーの衰退に合わせて、木ノ葉は秘密裏に海運と人材派遣業を立ち上げていたのだ。船の操舵に長けた人材を確保、後人の育成を図る事で雇用先を生ませる。これは里にとつても重要な事である。何故なら、一般の忍には忍を引退した時に働ける環境がないのだ。暗部「根」の人間には積立による退職金も年金もある。見舞金もある。死亡率こそ高いが、生き残れば再雇用先も「草」としての働き口もある為、比較的給料面では安定しているのだ。また、里の運営費の安定確保にも繋がる。

あとは、癒着や贈賄を防ぐ為の第三者機関を作るだけである。勿論、国からの金も必要だ。アレは火の国と木ノ葉を結び付ける鎖なの

だから。

「敵も愚かですな」

「ええ、我ら木ノ葉の恐ろしき、とくと味わせて差し上げましょう」

今日も、根の明かりは消える事はない。

数日後、ガトールカンパニーに木ノ葉の強制捜査が入った。